

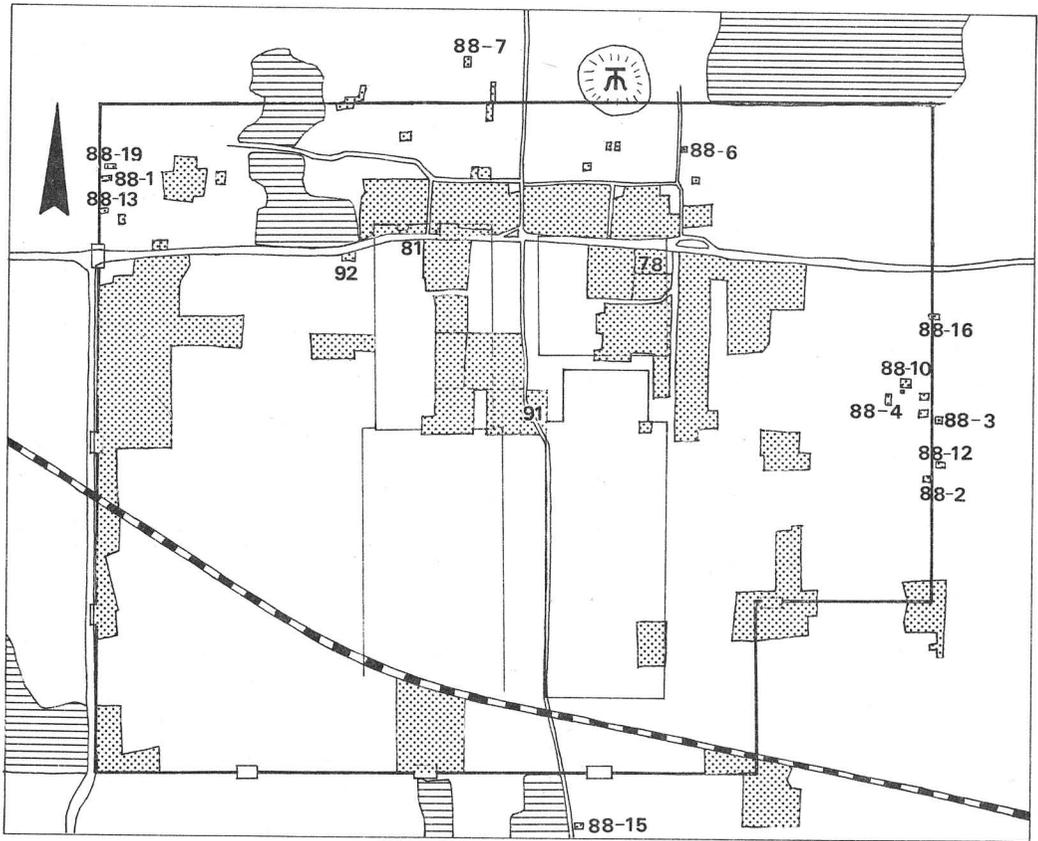
昭和49年度 平城宮跡発掘調査部

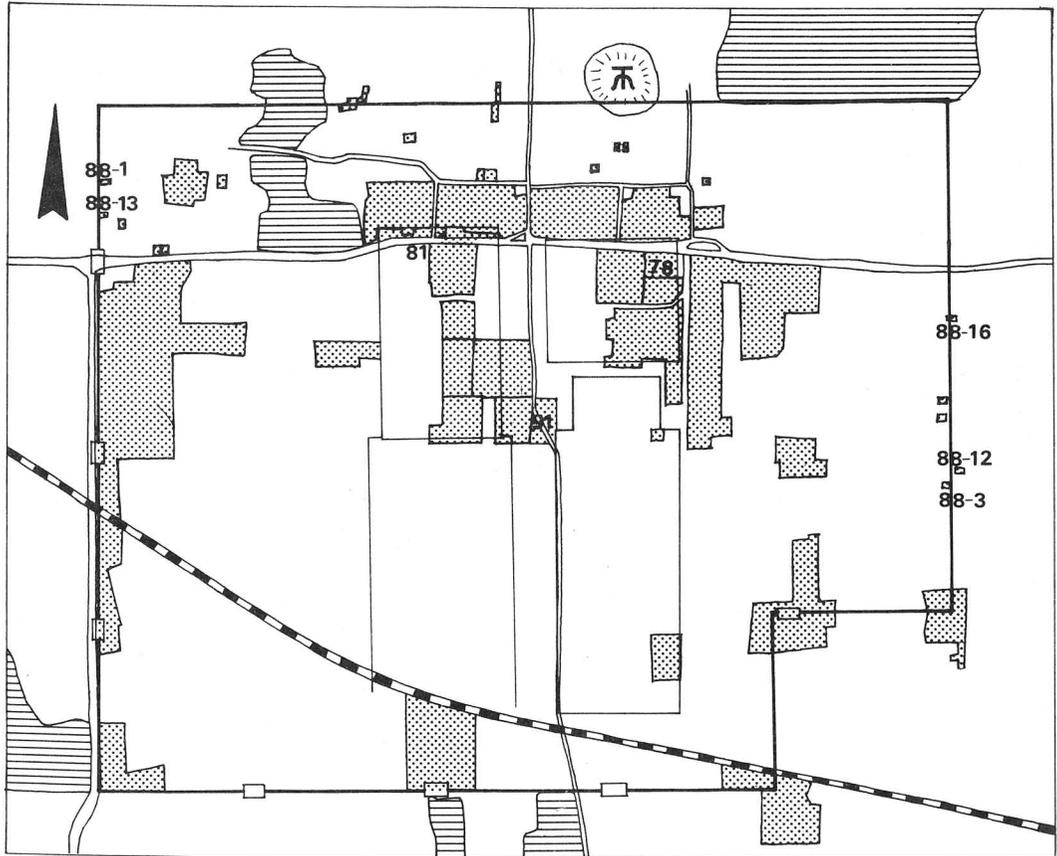
発掘調査概報



昭和50年4月

奈良国立文化財研究所





第1図 平城宮発掘調査位置図

昭和49年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報

平城宮跡発掘調査部は、昭和49年度の発掘調査を第1表のように実施した。以下概要を報告する。なお、第93次調査は昭和50年3月29日までの段階である。

次数	調査地区	面積	調査期間	備考
78(北)	第二次内裏後宮	1,980㎡	74年 7.1 ~ 9.14	
81(中)	大膳職南部	680	6.12 ~ 7.23	
86	左京三条二坊十・十五坪(奈良市大宮町)	3,000	2.12 ~ 6.4	三笠中学校跡地
88-1	平城宮西面大垣(奈良市二条町 2602・2605)	80	4.5 ~ 4.16	吉田新作氏宅
2	" 東面大垣(" 法華寺町 620)	2	4.23	中西弘宗氏宅
3	" " (" " 852)	12	5.7 ~ 5.8	中西宗嗣氏宅
4	" 東院 (" " 679-2)	8	5.7 ~ 5.8	松本橋二氏宅
5	法華寺旧境内 (" " 860)	11	5.9 ~ 5.10	塚本フミ氏宅
6	平城宮第二次内裏北方(" 佐紀町 2191)	10	5.11 ~ 5.13	中尾市次郎氏宅
7	" 北面大垣北方(" 佐紀内畑 2788)	40	5.23 ~ 5.24	小谷武雄氏宅
8	法華寺旧境内(" 法華寺町 648)	20.4	6.6 ~ 6.10	極楽寺境内
9	" (" " 414-5)	18	7.9 ~ 7.10	塚本 進氏宅
10	平城宮東院(" " 850-2)	25	7.15 ~ 7.16	大西義雄氏宅
11	左京二条三坊十一・十四坪(" " 上神明82-1)	400	6.28 ~ 8.3	興 信 産 業
12	平城宮東面大垣(" " 639)	11.2	8.29 ~ 8.30	中西清志氏宅
同補	" (")	2	9.25	同 上
13	" 西面大垣(" 佐紀町 2589)	13	9.19	中西安夫氏宅
14	法華寺旧境内 (" 法華寺町)	10	10.18	西田八重純氏宅
15	左京三条一坊八坪 (" 北新町)	16.6	11.6 ~ 11.8	吉川 勲氏宅
16	平城宮東面大垣 (" 法華寺町 80-6)	40.6	12.3 ~ 12.4	西口フミエ氏宅
17	法華寺旧境内 (" " 938)	9	75年 2.18	川崎 脩氏宅
18	左京二条二坊十五坪(" " 402の6)	10	3.4 ~ 3.5	福井敏男氏宅
19	平城宮西面大垣 (" 佐紀町 2623)	4	3.7	西田久義氏宅
89	左京二条二坊十四坪(" 法華寺町 301-1)	570	74年 4.11 ~ 5.17	埋文センター宿舍予定地
90	" 五条一坊四・五坪(" 柏木町長塚)	1,700	5.8 ~ 6.14	県警柏木予定地
91	第二次内裏西外郭	1,897	7.1 ~ 10.25	
92	宮西方官衙	198.7	75年 1.7 ~ 1.28	
93	左京八条三坊九・十五・十六坪	6,306	1.20 ~ 4.19	
	薬師寺西僧房地域(本坊北地区を含む)	1,715	74年 10.7 ~ 12.26	
	大安寺鐘楼	208	12.13 ~ 75年 1.13	
	大安寺北僧房	20	75年 2.12 ~ 2.14	松石宏矩氏宅
	西大寺	171	1.13 ~ 1.24	

第1表 昭和49年度発掘調査一覧表

I 推定第2次内裏後宮地区発掘調査（第78次北）

調査地は平城宮推定第2次内裏内郭の東北隅にあたる南北33m，東西60mの地域で，当調査部の呼称で6AAP-K地区である。今回の調査は，昭和35年の第3次調査以降，8回にわたって行なわれてきた内裏地域の調査の一環であり，今次調査によって内裏地域東半部の調査が終了したことになる。従来の調査結果と合わせて，内裏の構造と性格を知る上で大きな成果があった。なお遺構実測はヘリコプターによる航空写真測量によって行った。

1 遺構

調査地は，北方の市庭古墳（現平城陵）から大極殿に向かって南にのびる佐紀丘陵の上に立地する。丘陵を平坦に削平して当地域の造成を行ない，内裏地域を構成している状況はすでに知られていたが，当地域でも確認できた。すなわち，調査区全体を水田耕土と床土が覆っているが，調査区北端では床土の下がすぐに地山となるのに対し，調査区南端では床土と地山の間に厚い堆積土が存在する。この堆積土は奈良時代の整地土の可能性もあったが，堆積土には遺構はなく，遺構はすべて堆積土下の地山面で検出した。

検出した遺構には，掘立柱建物19棟，築地回廊1条，掘立柱柵9条，溝6条がある。これらの遺構は，層位関係や重複関係から大別5期，細分すると8期の遺構群にまとめることができる。

A 期 内裏造営に先行する遺構群である。掘立柱柵 SA6905 によって東西600尺，南北600尺の正方形区画を作り，内部に小規模な建物の作られた時期である。この時期の遺構として掘立柱柵1条，掘立柱建物2棟がある。

SA6905 発掘区東端を南北に走る掘立柱柵である。後の築地回廊 SC0156 の直下であり，3間分を確認した。柱間は10尺。

SB8010 10間×3間 南廂のつく掘立柱東西棟である。身舎部分を3間×2間×2間×3間に間仕切る。梁行9尺等間，桁行10尺等間，第78次南調査で検出された掘立柱東西棟 SB7864 と全く同規格で約20尺を隔てて南北に並ぶ。

SB4775 10間×3間 北
 廂のつく掘立柱東西棟である。
 身舎部分を3間×2間×2間
 ×3間に間仕切る。SB8010
 と同規模で、20尺隔ててSB
 8010と東西に並ぶ。

B-1期 A期に形成さ
 れた区画より南方にずれて、
 東西600尺、南北630尺の長
 方形区画の内部に、10尺方眼
 の割り付けによって建物が作
 られる時期である。この時期
 の遺構として掘立柱建物6棟、
 溝2条がある。

SB8000 10間×4間 四
 面廂のつく掘立柱東西棟、南
 には5間分の孫廂がつく。柱
 間寸法は10尺等間。

SB8023 独立した建物で
 はなく、SB8000構築用の足
 場である。

SB7873 9間×4間 東
 西廂の掘立柱南北棟建物であ
 る。南半部が78次南調査で検
 出されており、総柱の建物と
 考えてきたが、棟通りの柱穴
 には使用痕跡が認められない

期	遺	構	柱間数	備	考
A	SB8010	東西棟	10×3	南廂	
	SB4775	東西棟	10×3	北廂	
	SA6905	南北塀			
B ₁	SB8000	東西棟	10×4	四面廂	
	SB8023	東西棟			SB8000の足場
	SB7873	南北棟	9×4	東西廂	
	SB4825	東西棟	10×3	南廂	
	SB4780	東西棟	10×2		
	SB4783	東西棟	10×2		
B ₂	SD7870				
	SD7863				
	SB0064	東西棟	5×4	南北廂	南廂に縁がつく
	SA8043	南北塀			
	SD4810				暗渠
C ₁	SD8035				
	SD7872				木樋暗渠
	SB4822	東西棟	7×4	四面廂	
	SB8007	東西棟	5×3		東妻南側に1×1の廂
C ₂	SB8004	南北棟	5×3		
	SB8005	南北棟	7×1		
	SA8006				
D ₁	SB8008	東西棟	4×2		
	SB8042	東西棟	5×2		
	SA8009	南北塀			
D ₂	SC0156	築地回廊			
	SB8020	東西棟	7×2		
	SB7881	東西棟	7×4	南北廂	
	SB8013				SB7881の足場
E	SB0063	東西棟	12×4	南廂、縁	
	SA7876				
	SA8002	南北塀			
	SB8030	東西棟	7×3	南廂	
E	SB8003	東西棟	3×2		
	SA8044	南北塀			
E	SB8045	東西棟	5×3	南廂	

第2表 第78次北調査遺構時期別表

ため、今回形式を改めた。

SB4825 10間×3間 掘立柱東西棟建物である。南廂がつく。

SB4780 10間×2間 掘立柱東西棟建物である。

SB4783 10間×2間 掘立柱東西棟建物である。10尺北にSB4780が並び、SB4780の北50尺にSB4825が位置する。妻通りをそろえて3棟が並んで配置される。

SD7870 SB7873の西を北上し、直角に折れてSB8000の南を東進する溝で、SA6905を越えて長方形区画外へ流れ出す。数ヶ所で凝灰岩切石を検出した。本来は凝灰岩製の側壁と蓋をもつ暗渠である。

SD7863 南西から北東へ流れる斜方向の溝で、北端でSD7870に接続する。後にSD7870との接続点が西へつけ変えられている。

B-2期 B1期に続き、小規模な改修の行なわれる時期である。この時期の遺構として、掘立柱建物1棟、掘立柱柵列1条、溝3条がある。

SB0064 5間×4間 南・北廂付き10尺等間の掘立柱東西棟建物である。南面の4間には6尺の出をもつ縁がとりつく。

SA8043 SB0064の東南隅柱とSB4780の南北隅柱をつなぐ南北方向2間の掘立柱塼である。

SD4810 SB0064の南縁の下を通り、東南方向に下って溝SD7870に合流する凝灰岩製暗渠である。

SD8035 SD7870の北流部分から、ゆるい円弧を描きながらSD7870東進部分を抜けて、SD4810にとりつく溝である。

SD7872 南西から北東へ流れる溝で、端はSD7870にとりつく。SD7863をそのまま約10m西へ平行移動したものである。発掘区南端で幅40cm、長さ4.4mの樋暗渠を検出した。断面は梯形であり、板を組み合わせた暗渠であろう。

C-1期 この時期の遺構には、掘立柱建物4棟、掘立柱柵列1条がある。

SB4822 7間×4間 四面廂の掘立柱東西棟建物である。梁行、桁行ともに10尺等間。

SB8007 5間×3間 掘立柱東西棟建物である。東妻南側柱間に1間×1間の廂がつく。同位置、同規模で建て替えがあり、A・Bに分けられる。梁行7尺等間、桁行10尺等間。

SB8004 5間×3間 掘立柱南北棟建物である。梁行は8尺等間。桁行は10尺等間。

SB8005 7間×1間の掘立柱南北棟建物である。東端は掘立柱南北柵列SA8006とつながる。梁行、桁行ともに10尺。

SA8006 SB8007の東北隅柱から東へ5間分と、南に折れて3間目にSB0007にとりつく鍵形の掘立柱柵列である。

C-2期 C-2期に属する遺構には掘立柱建物2棟、掘立柱柵列2条がある。

SB8008 4間×2間の掘立柱東西棟建物である。柱間寸法は梁行10尺、桁行9尺等間。

SB8042 5間×2間の掘立柱東西棟建物。柱間寸法は梁行8尺、桁行9尺。

SA8009 SB8008の東から北へのびる掘立柱南北柵列。7間分を検出した。

D-1期 東西600尺、南北630尺の区画を築地回廊で囲み、回廊内に建物群を配置する時期である。この時期の遺構として築地回廊1条、掘立柱建物4棟、掘立柱柵列3条がある。

SC0156 発掘区東端を南北に走る築地回廊である。7間分を検出した。寄柱礎石は凝灰岩製で、上面中央に一辺5cm、深さ3cmの柄穴がある。西雨落溝の凝灰岩は抜き取られていた。築地勘廊下を東西に走る暗渠がある。西雨落溝と接する部分で一段低くなり木樋暗渠となっているが、築地本体の下では凝灰岩切石による暗渠となっている。

SB8020 7間×2間の掘立柱東西棟建物である。

SB7881 7間×4間 南・北廂のつく掘立柱東西棟建物である。約20尺を隔ててSB8020の南に並ぶ。身舎の柱間寸法は10尺等間、廂の出は北廂14尺、南廂13尺である。

SB8013 独立した建物ではなく、SB7881 構築用の足場である。6間×2間
SB0063 12間×4間 南廂と縁のつく掘立柱東西棟建物で、身舎・廂の柱間
寸法は10尺等間、縁の出は7尺。

SA7876 後宮正殿一画の北面を限る塀SA4761の東端から南に折れて、B期
より存続する後宮東面塀SA7876に接続する。

SA8002 築地回廊雨落溝の西を南北に走る掘立柱柵列である。発掘区南端で
終り、わずかに西へ寄った位置から掘立柱南北柵列SA7879が南へのびる。

D-2期 本格的な内裏造営の行なわれたD-1期に続く時期で小規模な改
修が行なわれる。この時期の遺構には掘立柱建物2棟、掘立柱柵1条がある。

SB8030 7間×3間 南廂の掘立柱東西棟建物である。柱間寸法は身舎9尺
等間廂の出は10尺。

SB8003 3間×2間 掘立柱東西棟建物である。柱間寸法は桁行8尺、梁行
9尺。

SA8044 SA7876を北に6間延長して内裏北面築地回廊と結ぶ掘立柱柵列で
ある。

E期 今回検出した遺構の中でもっとも時期の新しいものである。この遺
構には掘立柱建物1棟がある。

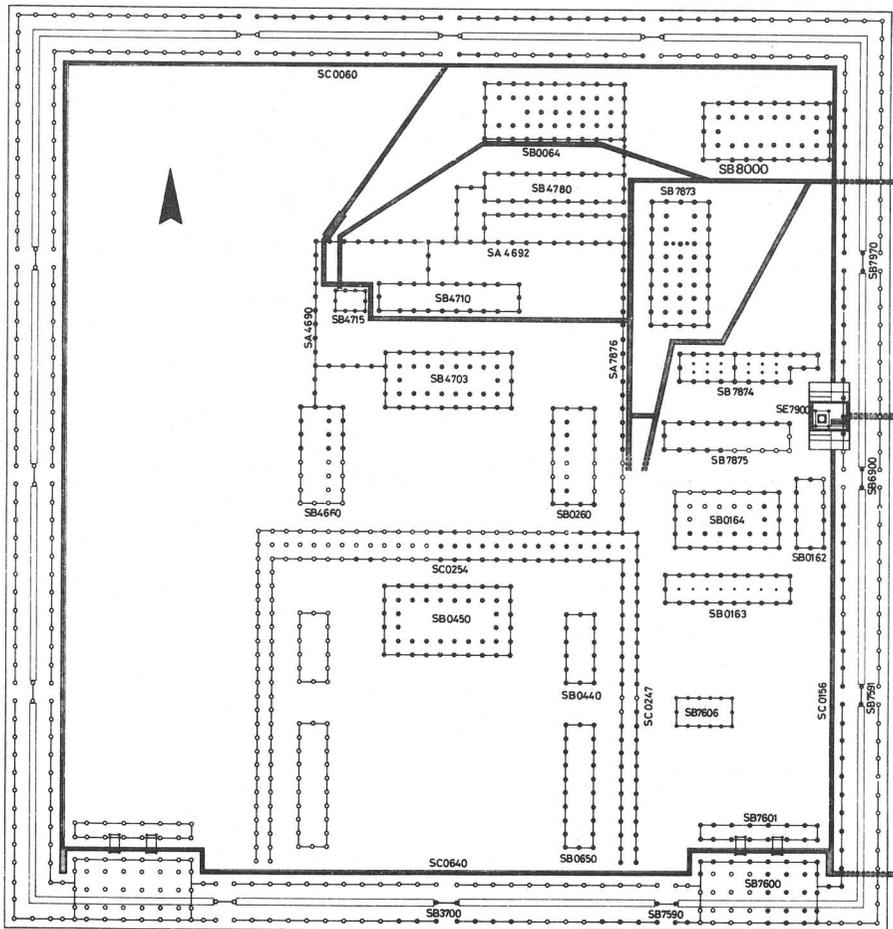
SB8045 5間×3間 南廂の掘立柱東西棟建物である。身舎の柱間寸法は8
尺等間、廂は10尺。

2 遺物

第78次北調査では、数多い柱穴や溝から多量の瓦類や土器類などの遺物を得た。
特にSD7870・SD4810溝からは遺存状況の良好な瓦類、土器類が出土した。遺
物についてはなお整理中であるため要点のみを報告する。

瓦類 今次の調査でもっとも大量に出土したのは瓦類である。出土した瓦
類には、丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦がある。軒瓦では、軒丸瓦が27型式165個
体、軒平瓦が23型式184個体ある。他に型式の判別できない小片が軒丸瓦に10点
ある。

型式の判明した165個体の軒丸瓦のうち、最も量の多い6313型式は軒平瓦6685型式と組み合わせる。次いで多い6311型式・6225型式は、それぞれ軒平瓦6664型式・6663型式と組み合わせる。これらは神亀年間を中心とした時期の瓦である。また6664-C型式のように、和銅年間にまで遡るものもある。その他時期の新しいものもないわけではないが、全体的に古い時期のものが集中していることがいえる。ただSB8000の柱掘方埋土中から6133Kと6664Fが出土し、また柱抜取穴から6732Cが出土しており、この地域の造営に対してより十分な検討が必要となった。



第2図 推定第2次内裏D期遺構配置図

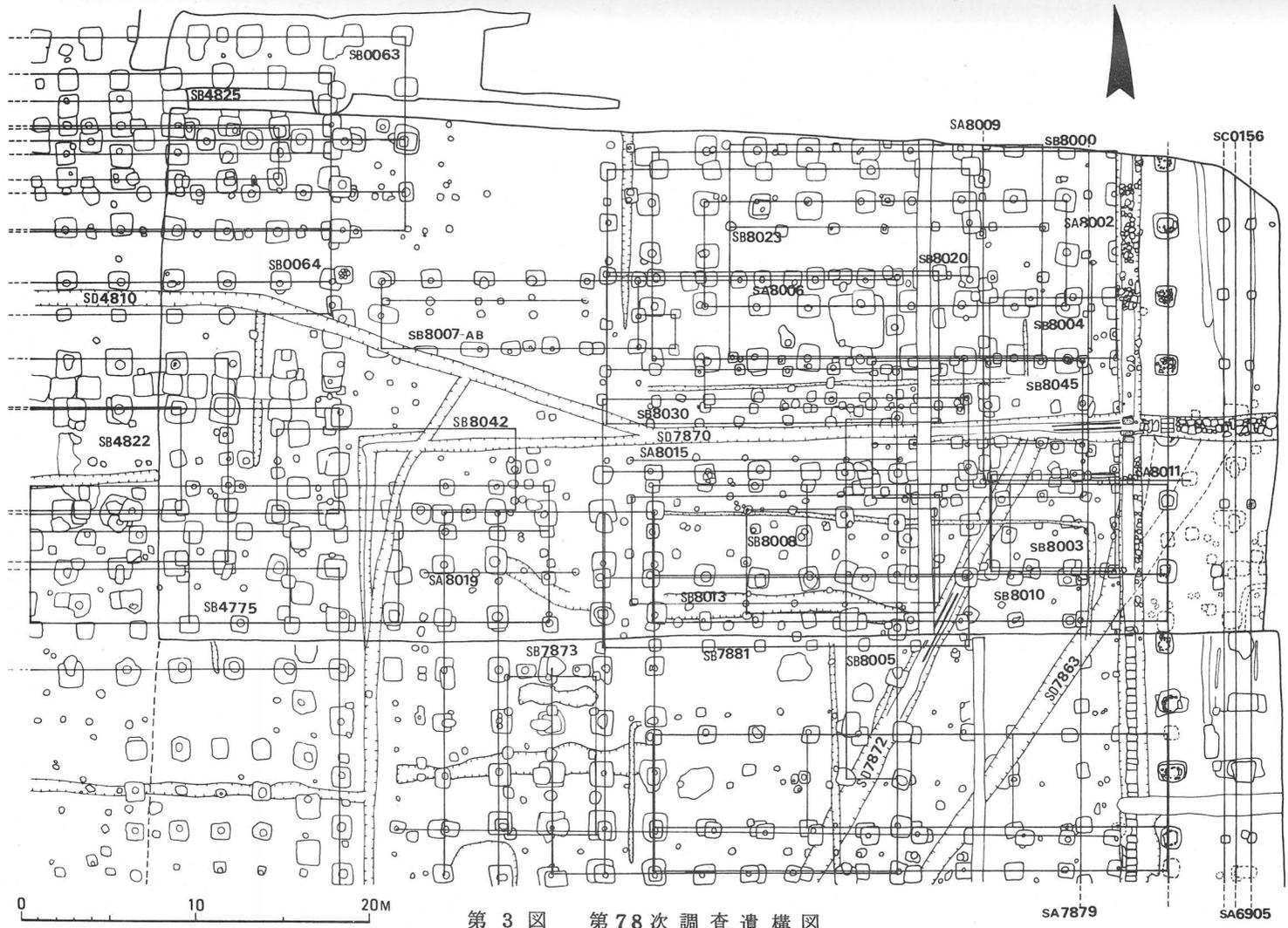
土器類 溝 SD4810・SD7870 から土師器・須恵器等の土器類を得た。土師器では、杯・皿類が多いが、器面の荒れがひどく、遺存状況は良くない。須恵器では杯皿類は少なく、大型の甕類が注目される。また、SB4780 の柱抜き取り跡から土師器甕が 1 個体、完形で出土した。

3 小 結 以上、大別 5 期、小別 8 期の遺構と遺物を記してきたが、今回の発掘調査の結果、内裏地区の造営時期区分について、従来の説を根本的に修正しなければならない新知見を得た。

内裏を囲む築地回廊 SC0156 は、これまでⅡ-1 期の造営にかかるものとされてきたが、B 期の SB8000・SD7863 を築地回廊基壇下で検出し、C 期以後の造営にかかることが明らかとなった。SB8000 の造営時期については、その柱掘方埋土中より軒丸瓦 6133K 型式、軒平瓦 6664F 型式を、柱抜き取穴より軒平瓦 6732C 型式を検出したことによって、B 期の上限が聖武天皇即位の神亀年間に、下限が天平末期頃と推定される。このことから、築地回廊の造営の時期については、さらに降る可能性も認められるが、さきにふれたように、他の出土遺物との関連で考えていきたい。また、内裏外郭西南隅の調査（第 91 次調査）成果と併せて今後の課題としたい。

他方、D 期の造営時期については、SA4761 の柱掘方埋土中より軒丸瓦 6282 型式、SA7876 及び SB7881 の柱抜き取穴より軒丸瓦 6282 型式、軒平瓦 6721 型式が多く検出されたことから、上限が天平末頃と考えられる。従来、奈良時代末期～平安時代初期とされてきたこの時期の造営が大幅に遡ることも明らかとなった。

今回の調査によって内裏内郭東半部の調査が完了したことになる。内裏地域の性格を明らかにするため、さらに検討を加えていきたい。



第 3 図 第 78 次 調 査 遺 構 図

Ⅱ 推定第2次内裏西外郭地区発掘調査（第91次）

調査地は本調査部の呼称で6ABE-G区と呼び、平城宮跡の推定第二次内裏外郭西南隅にあたる。対称位置の内裏外郭東南隅は第35次として調査されており、その発掘成果から、内裏外郭を囲む築地塀と礎石建物の存在が予想されていた。また、調査区西側は第41次として調査されている。

1 遺構

平城宮の北辺から推定第一次内裏地域と第二次内裏地域に向って、2つの丘陵が張り出している。調査地はこの2つの丘陵にはさまれた谷間に位置する。平城宮造営以前は低湿地であり、流木や埴輪片を含んだ黒色粘土が旧地表を覆っている。この黒色粘土の上に平城宮造営工事に伴う用材の削り屑や檜皮、木簡を含んだ黒色粘質土層（木簡層）が薄く堆積していた。この木簡層の上から埋め立て工事が行われている。埋めたては数回に及んでおり、厚い所では1.6 mにも達するが、基本的には2期に大別できる。そしてこれら2期の整地面で遺構を検出した。

検出した主な遺構には、礎石建物1棟、掘立柱建物6棟、築地塀1条、門1棟、掘立柱柵2条、基壇状遺構1がある。これらの遺構は層位と重複関係によって3期の遺構群にわけることができる。

A 期 造営以前の旧表土上に厚さ約50cmの第1次整地を行ない、遺構群を形成する時期である。この時期の遺構には掘立柱柵2条、掘立柱建物5棟がある。

SA8165 発掘区中央を東西に走る掘立柱柵である。後の築地塀SA8170の前身であるが、西面は確認できなかった。柱間寸法は10尺等間である。

SA8168 SA8165の1 m南を東西に走る掘立柱柵で、2間分を確認した。柱間寸法は9尺。

SB5495 3間×2間の掘立柱東西棟である。第41次調査で西2間分が検出されており、今回の調査で規模が判明した。桁行・梁行ともに7尺等間。

SB8181 4間×2間の掘立柱東西棟である。桁行7尺等間、梁行6尺等間。

SB8182 5間×2間の掘立柱南北棟である。桁行7尺等間，梁行8尺等間。

SB8183 掘立柱建物であるが，発掘区外へ張り出すため，規模不明である。

SB8184 掘立柱南北棟である。発掘区外へ張り出すため，規模不明である。
桁行8尺等間，梁行9尺等間。

B 期 東西柵 SA8165 以北に第2次整地を行ない，一段高くした上に内裏外郭を囲む築地塀を設ける時期である。この時期の遺構には築地塀1条，門1棟，礎石建物1棟，掘立柱建物1棟，基壇状遺構1がある。

SA8170 内裏外郭を囲む築地塀である。A期の掘立柱柵 SA8165 の上を通り，西で直角に北へ曲がる。南面は礎石で基底幅6尺5寸，西面は掘立柱で基底幅9尺である。南面の西から9間東に門がとりつく。

SB8160 3間×2間の礎石門で，築地塀 SA8170 にとりつく。南半は後世の削平のため遺存せず，北の柱列のみを検出した。桁行は中央間13尺，脇間10尺で，梁行は12尺等間と推定される。北に雨落溝 SD8161 がある。

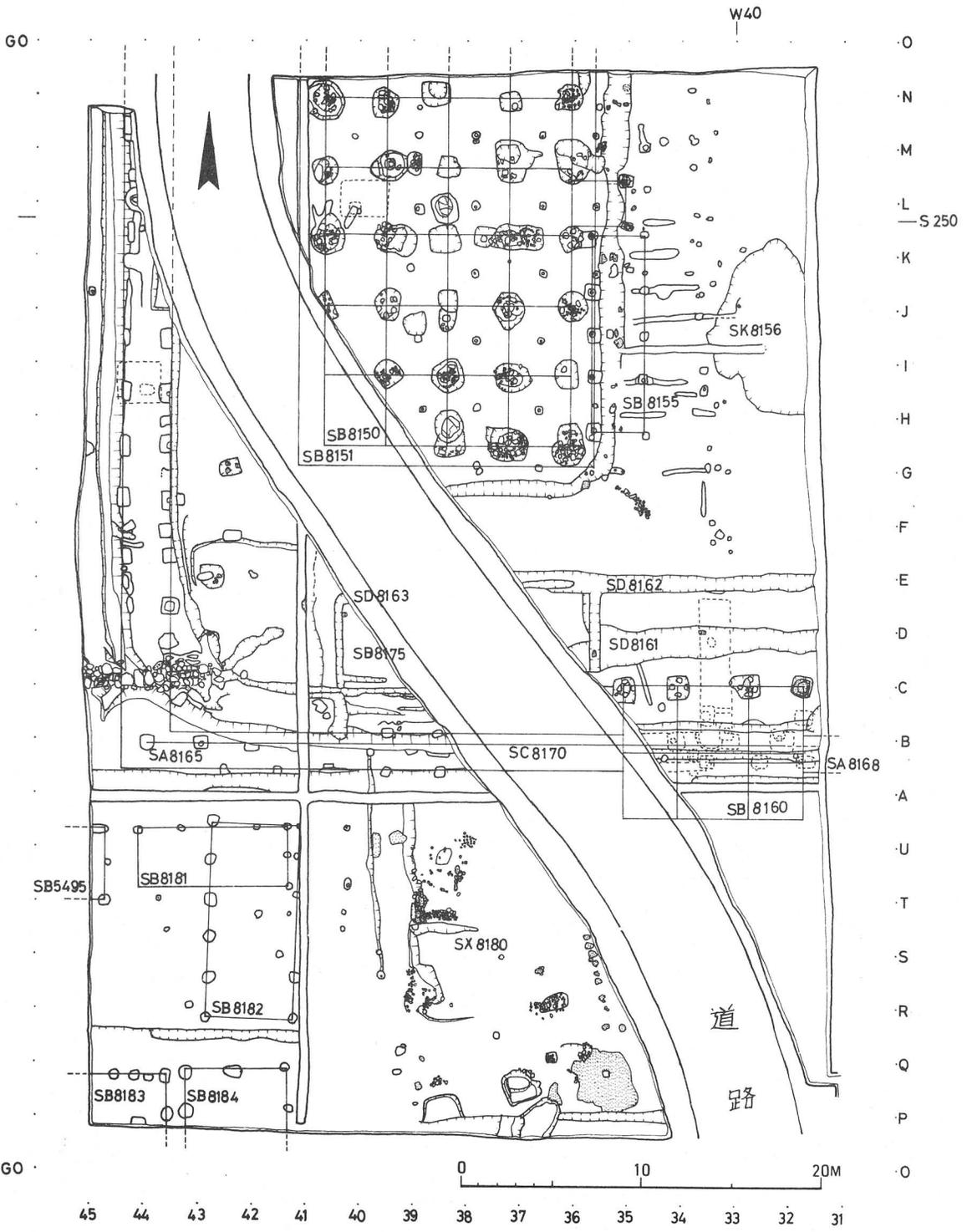
SB8150 7間×4間総柱の南北棟礎石建物である。南側5間分を検出した。桁行13尺等間，梁行12尺等間である。東面中央に幅9尺，長さ10尺の階段がつく。建物基壇隅は丸味をおび，基壇周縁には幅約1.5m，深さ約10cmの浅い雨落溝がめぐる。

SB8151 独立した建物ではなく，礎石建物 SB8150 建設用の足場である。直径30cmの小柱穴が各礎石位置の間に千鳥状に掘られている。

SB8155 4間×1間の掘立柱南北棟である。SB8150 の東南に沿うように建てられており，SB8150 の何らかの施設と考えられるが，性格は不明である。

SX8180 築地塀 SA8170 の南に接する基壇様の高まりで，西端に幅20cm，深さ10cmの小規模な凝灰岩南北溝がつく。建物基壇か門 SB8160 にとりつく通路になるのであろう。

SD8161 築地塀 SA8170 と門 SB8160 の北を流れる雨落溝である。築地塀西南隅では暗渠となり，第41次調査で検出した溝 SD5505 に接続する。暗渠は自然石を組み合わせたもので，床面と側面には石の平坦な面を配し，天井石には大き



第4図 第91次調査遺構図

めの石を用いている。規模は内法で幅40cm、高さ30cmである。

C 期 築地塀や礎石建物は残っており、築地塀の北に接して建物が1棟付け加えられる。

SB8175 築地塀の北に接する建物である。礎石建物のようで、柱穴は検出されず、わずかに雨落溝によって基壇が確認できた。基壇規模は東西13.5m(45尺)、南北7.2m(24尺)である。基壇東面は礎石建物SB8150の基壇東面と一直線に並ぶ。

期	遺 構	柱間数	桁行	梁行	備 考
A	SB5495 東西棟	3×2	7尺	7尺	
	SB8181 東西棟	4×2	7尺	6尺	
	SB8182 南北棟	5×2	7尺	8尺	
	SB8183		7尺	7尺	
	SB8184 南北棟	×2	8尺	9尺	
	SA8165 東西柵			10尺	
	SA8168 東西柵			9尺	
B	SA8170 築地塀			10尺	南面は礎石、西面は掘立柱
	SB8160 東西棟	3×2			門 礎石
	SB8150 南北棟	7×4	13尺	12尺	礎石 総柱
	SB8151				SB8150の足場
	SB8155 南北棟	4×1		9尺	
	SX8180				
	SD8161				SA8170雨落溝
C	SB8175				建物基壇のみ

第3表 第91次調査検出遺構時期別表

2 遺物

第91次調査地域からは200点を越える木簡や約900点の軒瓦をはじめとして多量の遺物が出土した。特に木簡類には「和銅」銘を有するものが数点あり、当地域だけでなく、平城宮全体の造営を考える上で貴重な資料である。

木簡類 旧地形のもっとも低い発掘区南西端を中心に、木屑や檜皮とともに木簡類や木製品が出土した。

木簡は総数242点で、このうち貢進物付札が30点、削り屑が167点である。付札では完形品の比率の多いことが特徴である。年紀のあるものが4点あり、いずれも和銅年間のものである。また、播磨国を「針間国」と表記するなど、用語上からもこれら一群の木簡の古いことが知られる。

貢進物の内容はいずれも食糧で、白米がもっとも多く、塩、軍布（海藻）が各1例ある。貢進物の将来地には、摂津、播磨、備中、丹波、尾張、三河、越前、讃岐、伊予の9個国がある。

さて、木簡年紀にみえる「和銅三年」といえば、藤原宮から平城宮へ都が遷された年である。和銅元年に平城遷都の詔が出され、平城宮・京の造営が始まるが、和銅四年に至るも造都の役民逃亡多く、宮垣未だ成らざる状態であった。今回出土した一群の木簡類は当地域が埋め立てられ、整地される以前の旧表土上に堆積していた。つまり、平城宮の造営開始直後に廃棄された木簡類とすることができる。造営工事に従事した諸国の役民への食糧支給の付札と考えてさしつかえあるまい。

木製品 木簡とともに少量の木製品や自然遺物が出土した。木製品には、櫛2点、曲物底板7点、曲物側板1点、箱側板4点、仕口のある板材1点、板状品・円棒・角棒等加工のあるもの数十点がある。自然遺物には松笠1点、桃種19点がある。

箱側板には2種がある。1は長方形板材の両短辺中央部に側板を組み合わすための出柄のあるものである。出柄中央、両短辺端上下、底面に木釘穴がある。2は長方形板材の両短辺の一方に出柄のあるもので、柄は入れ違いの形式をとり、

木釘で固定する。外面に「八名郡^{杉カ}□□□」と墨書のあるものがあり、木簡の転用の可能性が強い。

金属製品 SD8161の暗渠部から銅製帯金具が1点出土した。断面台形に打ち出した長方形の巡方表金具で、下方よりに長方形の透しをあける。四隅に鋌足を取り付け、裏面には鋌座金が残る。縦3.23 cm, 横2.18 cm。透しは縦0.52 cm, 横1.78 cm。

瓦類 約900点出土した軒瓦は、第2次内裏・朝堂院所用瓦が圧倒的に多く70%を越えるが、6296・6694がそれぞれ約50点出土していることは注意を要する。また、両者がSB8150・SA8170基壇積土内から出しており、この地域の造営年代に対する十分な検討が必要となった。

土器類 第91次調査では、土師器・須恵器・灰釉陶器、緑釉陶器等の土器・陶器を得た。いずれも量的には少なく、その多くが破片であり、遺存状況は良くない。築地塀SA8170基壇積土中からは神亀年間に比定しうる土師器・須恵器、木簡層からは和銅年間に比定しうる土師器・須恵器が少量出土した。SD8161の暗渠部からは須恵器杯Bが出土し、底部外面には、「埵」の墨書がある。他に土製品として、円面硯と蹄脚硯が各2個体出土した。

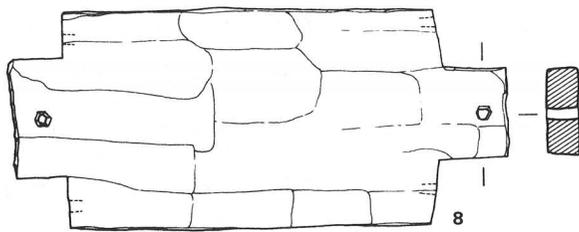
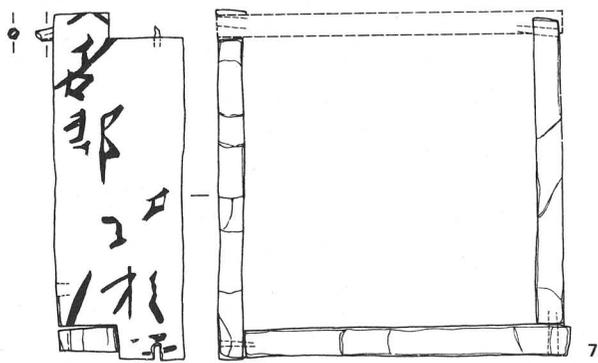
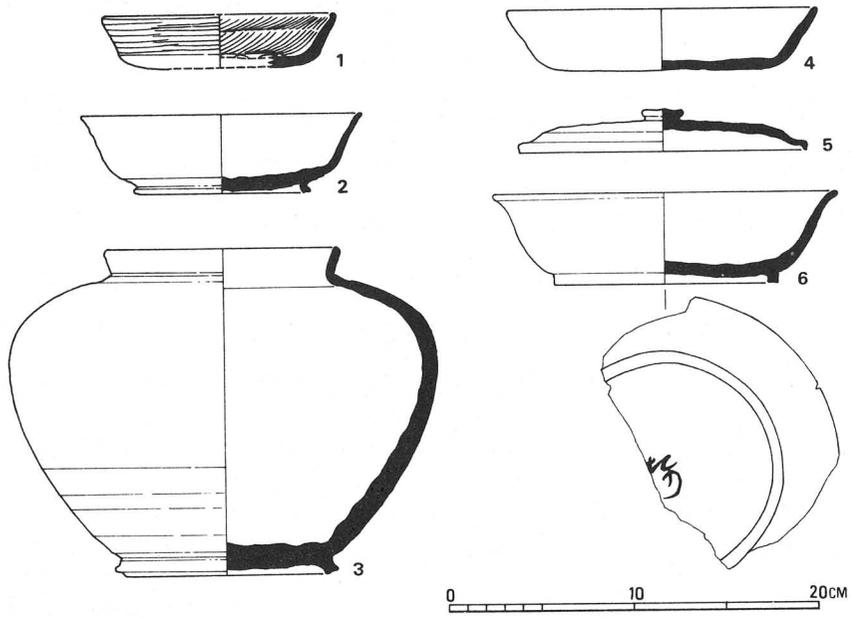
埴輪類 木簡層下の旧表土から埴輪類が出土した。いずれも小片で、家形埴輪が1点ある他はすべて円筒埴輪である。

3 小 結

先に述べたように、和銅の平城宮造営開始直後に当地域の埋め立てが行なわれている。A期の柵SA8165は後の内裏外郭地域を区画する柵であり、その南側(前面)に立てられた掘立柱建物群は造営工事に伴う仮設の建物群と考えられる。

第2次埋め立てが行なわれ、B期の建設がなされる。内裏外郭としての機能と外容とが本格的に整備されるわけであるが、この時期については、築地塀SA8170基壇積土出土の土器類と瓦類によって、天平年間におくことができよう。

C期については、B期の各種施設がなお存続している時期の中での小規模な改修とみることができよう。



第5図 第91次調査出土遺物

Ⅲ 大膳職地区発掘調査（第81次一中一）

第81次一中一の調査は、第2次～6次調査で発掘した推定宮内省大膳職地区のうち、当時民家があったために未調査地として残された地域約680㎡を行った。昨年度の81次東・西区に続き、これで大膳職地区の調査は終了したことになる。

1 遺構

今回の調査は、第2次調査の発掘区に一部重複して行った。検出遺構は、建物4棟、礎敷の溝1条、築地および側溝2条、土壌4等である。これらのうち新たに検出した建物2棟と土壌2を除けば、他はすべて第2次調査で一部を確認し、あるいはその存在が予想されていたものである。ここでは、すでに報告されている2次調査の内容との異同の問題も含めて、A～Eの五期に分けて述べる。

A 期 南北棟のSB167A・Bは第2次調査で5間分を確認していたが、今回南の妻柱を検出したので8間以上の建物となった。SB8117は5間×1間の小建物で、南側柱列は3間分しかない。規模や柱掘形も小さい点からみて仮設的な建物であろう。あるいはB期に含められるべきかも知れない。発掘区西側は、池状の落ちこみSG149があったと考えられる。

B 期 第2次調査で一部を検出し、5間×2間の東西棟建物と報告されているSB166は、SD130に連なるバラス敷の下層から廂の側柱列を新たに検出、5間×3間の南廂建物となった。従来、SB166は、SD130より新しい時期の造営とされてきたが、この事実から前後関係は逆転した。第2次調査で検出し、SB166と棟通りを揃えるSB113もおそらくこの時期に溯ると思われる。SG149はこの時期には整地されていた。SG149の整地層に一部かかるSA109の北側溝下層の整地土から軒平瓦6721・6732型式が出土している。

C 期 SD130は幅70～80cmの礎敷きの溝で、南縁は砌として礎を一列にならべている。東西長約13m分を確認したが、発掘区の東端は新しい時期の土壌SK8118に切られている。SD130に接して南側はバラス敷の舗道が広がる。バラスの南端はSA109の北側溝に切られていてもとの幅は不明だが、現存部での

最大幅は約6mをはかる。SD130は大膳職地区の南縁を区画する塀か土塁の雨落溝と考えられたが、最近では推定第1次内裏をめぐる築地回廊の雨落溝と考えられ、年代も和銅当初の創建にかかわるとされている。しかし、SD130に連なるバラス敷舗道の下層にSB167・166等が存在することと、SG149が整地された時期からみて、この築地回廊を和銅創建時に溯らせることは不可能であろう。

D 期 SB8116・SA109Aがこの期の遺構である。SB8116は、SD130を切っている5間×2間の東西棟で、第2次調査で検出したSB112・131・145と棟通りを揃える建物である。SA109は東西行の築地で、両側に側溝がある。築地本体、寄柱跡は削平されていて確認できなかった。側溝は土壌を連ねたかたちで、南側は深く、北側は相対的に浅い。西半分はSG149の整地土にかかるために、南側溝の南肩は確認できなかった。この付近では築地基底や溝の堆積は大きく二層にわかれる。築地基底の上層からは軒丸瓦6284・6282型式が出土した。溝の下層は炭化物まじりの土層で、大量の土器・瓦類が出土した。SA109が少なくとも2時期にわたることを示すものである。土壌SK8126は、第2次調査でSA109に平行する溝とされたSD106に連なると考えられる。

E 期 SA109Aを修復したSA109Bの時期で、この期の遺構は他に認められない。

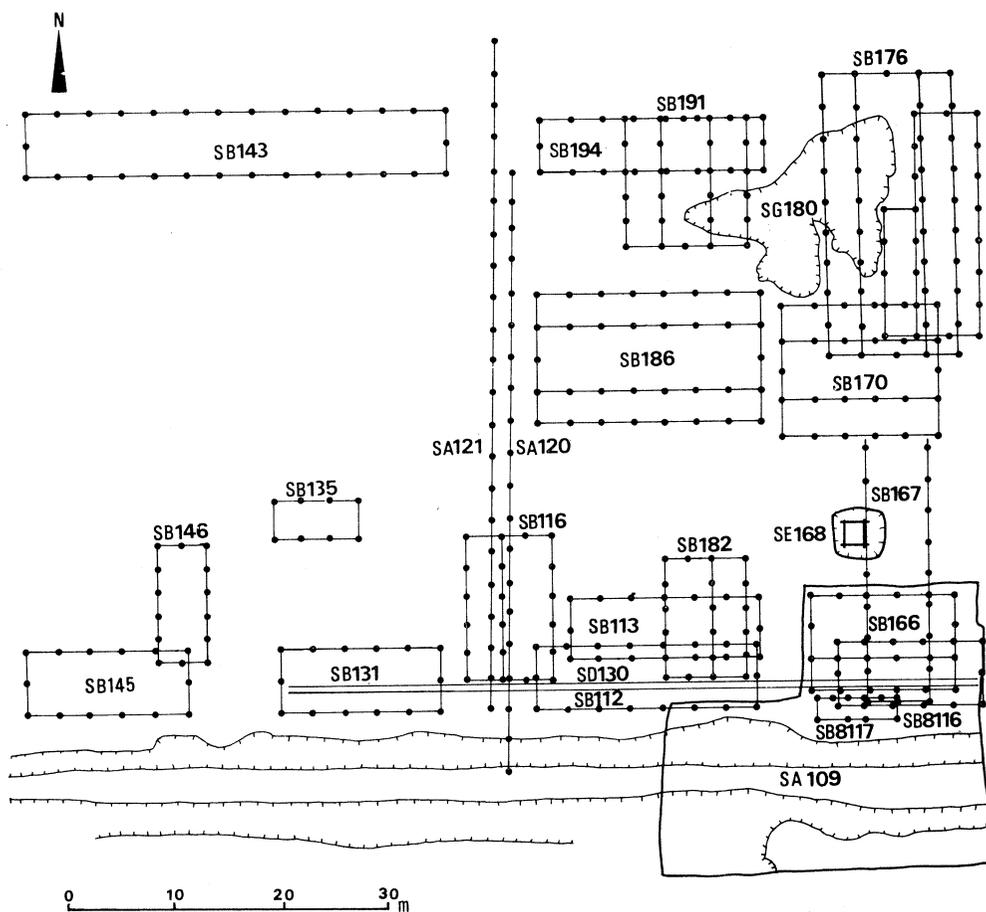
2 小 結

今回の調査所見が従来の成果と異なる主な点を改めて示せば、1)SB166が南廂の建物となり、SD130より造営期が溯る。2)SD106・SA105が土壌である可能性が強くなった。この二点である。

1)は、SD130の性格と年代にかかわる問題である。つまり、SD130は「平城宮調査報告」II・IVでは、大膳職地区南縁の築地塀か土塁で、年代も恭仁京から還都した天平年間の造営と考えられた。この後、第41次、69次、77次等、第1次内裏地区の調査が進むのに伴って、その関連からSD130は内裏をめぐる築地回廊のうち北面回廊の南側雨落溝であり、年代も和銅当初の創建にかかると考えられるようになった。しかし、今回の結果はSD130の年代を和銅年間に溯らせ

ることは不可能であり、すくなくとも「平城宮調査報告」Ⅱ・Ⅳの段階にまで再び降らせる必要性を示している。これは第1次内裏の北面回廊の位置と大膳式地区の年代区分を再検討すべき問題を派生させる。

2)SD106・SA105は「平城宮調査報告」Ⅱ・Ⅳでは第1次内裏北方でSD130・SA109にそれぞれ平行する溝、築地と考えられていたが、今回と前年度の81次西区の調査でこの可能性はほとんどなくなった。従って1)のSD130を含めて各時期に第1次内裏北側と大膳職地区南側との境をいかなるかたちで区画していたかは未解決の問題として残される。この地域は現在道路敷となって十分な調査は行えないが、近く実施される第87次北の調査によってこれらの手懸りが得られるものと思われる。



第6図 大膳職西半部遺構配置図

Ⅳ 西方官衙地区発掘調査（第92次）

本調査地区は佐紀池南端の堤に接し、小字「池尻」にあたり、平城宮跡の整備にともなう浄化水漕の設置のために事前の調査として実施したものである。発掘位置は推定第1次内裏の西面築地回廊の西方で、第28次調査地の北延長部分に相当し、佐紀池を含む南北に延びる谷状の低地にあたる。

1 遺構

調査の結果、池の一部、溝、堰のようなもの、塀列、土壇などの遺構を検出した。うち奈良時代の遺構は大きく2期にわけられる。

A 期 発掘区の大部分が池状の低地となっており、南西と東南側が高く北に向って地山が下降する。この中央部に南北溝SD8195がある。幅2.3m、深さ0.8mあり、南流するが発掘区南端では溝肩が明瞭でなくなる。この溝および低地部分には木屑を多量に含む暗褐色粘土層が40～30cm程厚く堆積し、これより和銅6年の年紀のある木簡が出土した。

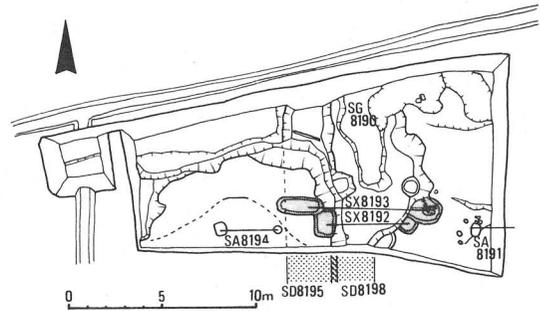
B 期 発掘区の西南部および南北溝SD8195が埋めたてられる。整地層は1m前後あり、池岸が袋状にいりくんだ部分に南北溝SD8198がつくられる。池との接続部の両岸にSX8192とこれにともなうSA8191・SA8194がある。SX8192は後に北側に寄せてSX8193につくり変えられる。柱間隔はSX8192が4.2m（16尺）、SX8193が6m（20尺）ある。堰のような施設かともみられるが確証はない。

なお、池中の最下層の木屑を含む暗褐色粘土層の上方には木片、炭化物、土師器、須恵器、瓦片を含む数層の堆積土があり、奈良時代を通じて池であったと考えられる。ただSD8195とSD8198に関して、両者は第28次調査検出の南北溝SD3825につながるものと推測しているが、SD3825に対してSD8195は西へ2m、SD8198は東へ1.5m程ずれている。この点に関しては将来、両地区の中間部分の調査で明らかにしたい。

主な出土遺物には土器類のほか軒丸瓦6284型式20点、木簡38点、木製品（曲物

・櫛・ヘラ)がある。うち軒瓦6284型式16点と木簡，木製品は暗褐色粘土層から出土した。

なお，遺構保存のため，発掘区を西側に延長した結果，近世の土壌，攪乱層によって地山面が掘り下げられていることが判明したので浄化槽の位置を西へ避けることとした。



第7図 第92次調査遺構図

V 平城宮大垣地区発掘調査(第88次) 現状変更届等にかかる調査

民家密集地における現状変更届等による発掘調査の中には，東西の大垣地区にかかるものが数件ある。いずれも家屋の改築による事前調査であるため，小範囲の発掘しかできず，後世の攪乱もまたいちぢるしいものであった。そうした中で大垣の状況を若干なりとも把握できるものがあった。

東面大垣 いずれも東院の東面大垣地区であり，88-3・12次では坊間大路の西側溝の一部を検出した。溝は全幅を明らかにすることはできなかったが，東院東南隅地域の発掘調査(第44次)の所見から判断したものである。88-2・3次では築地本体の検出はできなかったが，大垣基壇と西雨落溝を2か所で検出している。また88-16次では，大垣基壇が地山を削り出しているものであることが明らかとなった。そしてこの上に約30cmの積土を残していた。

西面大垣 88-1次では西面大垣基壇および西の雨落溝を検出した。基壇は幅約6mで，南北にのびるが，地山上に約40cmの積土をとどめていた。88-13次でも大垣基壇の地固めのための整地土を検出した。いずれの地区でも築地本体は検出できなかった。88-19次では発掘範囲の関係から大垣に及ぶことはできなかった。

Ⅵ 左京三条二坊十五坪の発掘調査（第86次）

第86次調査は奈良市庁舎建設予定地である旧三笠中学校跡地（奈良市北新町61番地）でおこなった。昭和48年度の庁舎敷西半部の調査（第83次）を継承し、その東半部を発掘したものである。両次の調査による総発掘面積は約6,500 m^2 にのぼる。

今次の調査では十五坪の中心部分の遺構ならびに二坊大路の西側溝を検出した。第83次調査の成果と合せると、十五坪の主要部分の全貌が明らかになった。前年度概報と一部重複するが、以下に概述する。

1 遺 構

古墳時代の大溝 SD881は発掘区東辺中央より蛇行しつつ西南流し、第83次調査において東南隅で検出した川の流路へと連なる。奈良時代には砂で埋り、もはや水は流れていない。幅3～7.5 m 、深さ1.5 m 内外で、おびただしい量の土器、木製品が堆積していた。遺物から5～6世紀の間に存在していたことが判る。

平城京の遺構 十・十五坪を画する南北方向の小路および二坊大路西側溝の一部を発見した結果、十五坪の東西長を410尺と推測し得た。南北長は不明である。また、坪の内周に柵などを巡らす他、一定の間隔をおいて内柵ともいうべき囲いを巡らせ、幾つかのブロックに分割してあるが、全体としてはこの坪をひとまとまりの宅地として利用していたと判断できる。

遺構は奈良時代初期から平安時代におよぶ100年の期間に属し、A・B・C・Dの4期に大別できる。奈良時代（A・B期）の建物配置は、大規模な東西棟の主殿を中心にしその周囲に脇殿・井戸を配し、さらに後方に小規模な付属屋を加えた2群を東西に並置する点を基本とする。奈良末ないし平安時代（C・D期）になると、この坪は東西に2分された上、東部に遺構が集中するようになった。この場合も大きな主屋を中心に小さな付属屋を配するが、奈良時代のような規格性は認め難い。A期はA₁～A₃、B期はB₁、B₂に細分できる。

A₁ 期 この時期の建物配置は、坪の中央から東西に85尺を振りわけて2本の中

軸線を設定、各々の軸線上に南北に重列する3棟の東西棟建物を配したものの。9間×2間南北庇付建物SB864が西群の主殿となり南北にSB862, SB868を従える。東群の主殿は5間×2間四面庇付建物SB980で、SB974, SB989が付属する。SA969で両群を画し、中央にSE968を配す。他にSA870, SA961, SA990などで建物群を囲む。これら内柵は断続して存在し、坪を $\frac{1}{2}$ あるいは $\frac{1}{4}$ に区分するものではない。

A₂ 期 A期の配置を踏襲するが、西群で大改修を行う。SB864の桁行を7間に縮めてSB882をたて、それに伴って南方のSB861を西へ寄せてSB862に改めたのである。また、小路東側溝内添いに柵SA871を設け、SE968の西にSE967を掘る。東群ではSB980とSB974は存続し、その間に柵SA973, SA976などを加えた。

A₃ 期 A期建物を部分的に改修した時期。SB866, SB868を廃し、SB867をたて、ほかに柵の改廃をおこなった。

B₁ 期 A期の主要な建物を廃し、以前とは異なる建物配置をとる。坪の心より110尺を振りわけて東西2群の建物を並置するという原則は存続する。主屋とみられる2棟の南北庇付建物(SB869, SB987)は北方に移動し、柱筋をそろえて東西にならぶ。2棟の南方SA863B, SA973までの間を空地とするほか、北方の付属屋も減少し、建蔽率は低くなった。SE967は存続する。

B₂ 期 配置に大幅な変更はないが、中央の付属屋の改修を行った。SB962とSB964を廃し、それにかえてSB963, SB996をたてたのである。

C 期 B期の構築物はすべてなくなり、建物などは東北隅にまとまる。SB986を主屋とし、その北側にSE991を掘り、西方に小規模建物を配する。この時期には条坊小路は廃絶し、SA966により坪が東西に2分された可能性がある。

D 期 C期と同様に坪の東側に建物をまとめるが、配置は全く異なる。南庇の柱筋を坪の中央にそろえ、5×2間の2面庇付東西棟(SB970)をたて主屋とする。その北方にSB995, SB985を配す。いずれも身舎柱間と比し廂間が広い。SB970の東にSE974を掘り、その北にSB988をたてる。D期では、A・B期の

ように2棟の主屋を東西に並置するのではなく、南北に重列するのである。

中世の遺構 十五坪の東側部分では、校庭造成時の盛土の下に、佐保川の氾濫によると思われる厚い砂の堆積があった。これは上層の粗砂と下層の細砂にわかれ、下層は5～20cmの厚さがある。下層から柿経などの中世信仰に関する遺物を発見した。願文にみられる年紀により15世紀前後に堆積したものと判断できる。

2 遺物

a) 古墳時代の溝SD881から5世紀末ないし6世紀初頭とみられる土器の一括資料を得た。内容は須恵器6点、土師器321点で、土師器には壺、高坏、甕などがある。土器の他に多量の木製品が出土した。中に農耕具（長柄鋤、着柄鋤、エブリ形農具、鍬）などの一括出土があり、当時の農耕具を知る上で貴重な資料である。他に工具、紡織具、建築部材、容器などを含む。

b) 奈良・平安時代の遺物としては瓦磚類、土器、木製品、金属製品がある。出土状況は掘立柱建物柱穴、井戸、土壇などから比較的まとまって出土したほかは、調査地域全般に分散して出土したものである。

瓦磚類の多くは丸・平瓦で軒瓦は少なく、ほかに隅切平瓦や若干の磚を含む。軒丸瓦としては11型式11種、うち従来知られぬ1型式がある。軒平瓦には13型式14種があり、1型式2種が新発見例である。宮内出土瓦との共通性を示す傾向はB期からD期にわたるが、B期に強く、十五坪の独自性を示す要素はC期以降にあらわれる。

土器・土製品のうちまとまったものとしては井戸出土品がある。SE967からは奈良時代末頃の土師器坏A、B、皿、碗、蓋、須恵器坏蓋、壺、鉢および甕の破片の他施釉陶器が出土。SE968からは8世紀中葉の土師器甕の体部と把手の破片および須恵器長頸壺が、SE979からは9世紀中葉頃に下限をもつ土師器坏、皿、黒色土器坏、皿、須恵器坏A、B、甕片および緑釉坏、土馬が、さらにSE991からは奈良時代末ないし平安時代初頭の土師器坏、皿、高坏脚部、甕片、須恵器坏A、B、蓋、壺、甕のほか、土錘が出土した。

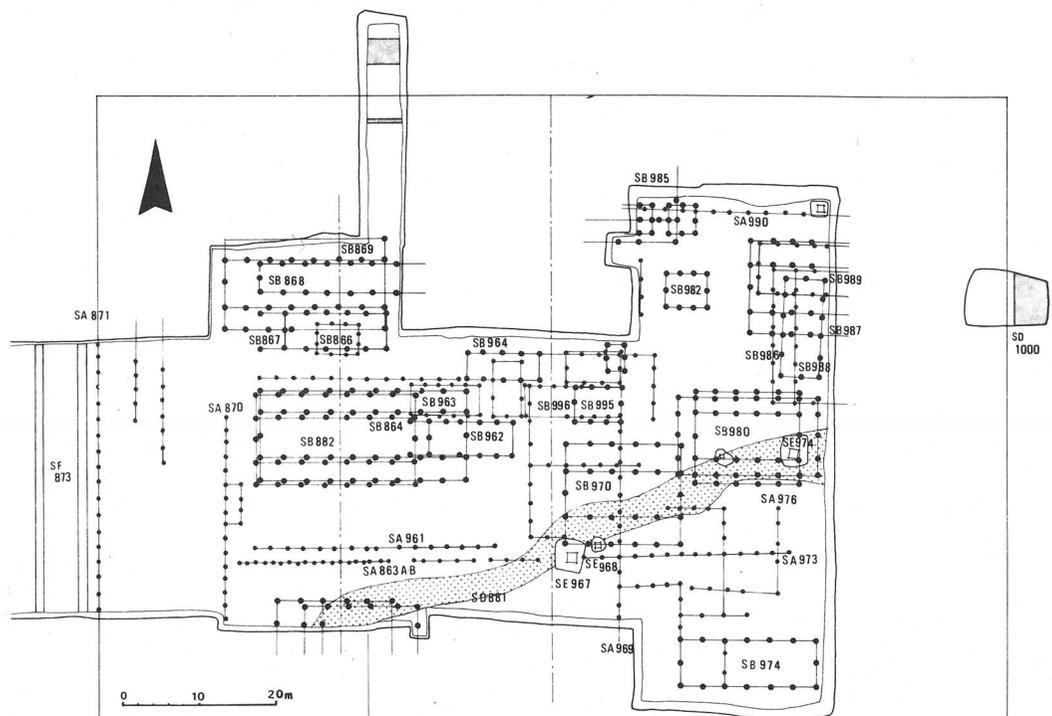
以上の他に、三彩壺の底部小片、灰釉皿、越州窯などの磁器、硯、猪形土製品、

鋤鍤車などの出土をみた。

木製品はSE967から出土したもので、木筒、削掛け、削物容器、挽物皿、曲物容器、陽物形木製品、木櫛などがある。この井戸の梓木最下段は鉄釘でとめてあった。

金属製品には鉄釘の他に和同開珎（SB970柱穴礎板下面に付着）、富寿神宝（SE979出土）、中国銭、鉄楔などがある。

c) 中世の遺物には笹塔婆、押印笹塔婆、名号札、印仏、供養札、柿経、絵馬、納骨五輪塔婆、納骨小曲物などの信仰に関するもののほか、木櫛、下駄などの日用品がある。願文の年紀の示す永正12~15年頃に氾濫によって一気に堆積したものである。



第8図 左京三条二坊十五坪遺構配置図

Ⅶ 左京二条三坊十一・十四坪の発掘調査（第88—11次）

発掘調査は、十一・十四両坪間の小路にかかると推定される位置に南北10m、東西40mのトレンチを設定しておこなった。

遺構検出面は、整地以前の水田面から約1mの下にあり、この面において溝3条、掘立柱穴群を検出した。

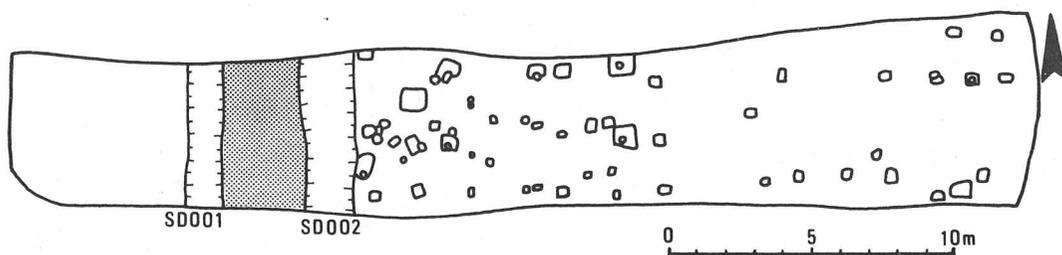
1 遺構

掘立柱穴はおおむね1辺約50cm以下のものであり、トレンチ発掘の制約から建物としての規模、性格等を明らかにすることは困難である。これらの柱穴群は、SD001の東方に存在し、これより西方には存在しない。SD001・002は状況がよく似ており、暗灰色粘土が埋土となっている。溝の底部には細かい砂がみられ、流れによるえぐりも数か所に見受けられる。このことから、SD001・002にはさまれた約2.8mの間は、この地域における南北方向の道路と考えることができる。

この溝々間の中軸線は、平城宮朱雀門中軸線から1447.6mの位置にあり、仮りに十一・十四坪間の小路とした場合、平城京造営尺（曲尺×0.976）で換算すると、推定位置より約15m西に寄ることになる。したがって、この地域は2坪以上にまたがる宅地の可能性も認められるが、今回の小範囲の調査によって早急に結論を求めることはできない。

2 遺物

出土遺物は土器片、瓦片が若干出土した程度である。土師器底部破片内面に「朝臣」と針書きしたものが1点見られるのは興味あることである。



第9図 左京二条三坊十一・十四坪遺構図

Ⅷ 左京二条二坊十四坪の発掘調査（第89次）

本調査は、当研究所埋蔵文化財センター宿舍建設に伴う事前調査である。調査地は、二条二坊十四坪にあたり、東側は推定東二坊大路と境を接している。調査は二坊大路側溝の位置と、坪境における遺構の状態を知ることが目的とした。予定地中央を南北に貫く長さ約60m、幅約6mのトレンチ1と、その両側に長さ約10m、幅約6mの東西トレンチ各3を設定した。

1 遺構

検出遺構は、検出層位や伴出遺物によって奈良時代中葉から平安時代初期およびそれ以降に分けることができる。奈良・平安期の遺構は、建物8棟、柵8列、溝5条、井戸1基、土壇10等がある。なお、当初の目的のひとつであった大路側溝は確認できず、今回の調査範囲外であることが明らかとなった。

A 期 南北に連るSK017・018・019・022の土壇があり、後に大量の土器瓦とともに整地、SB002・003・08, SA004を作る。

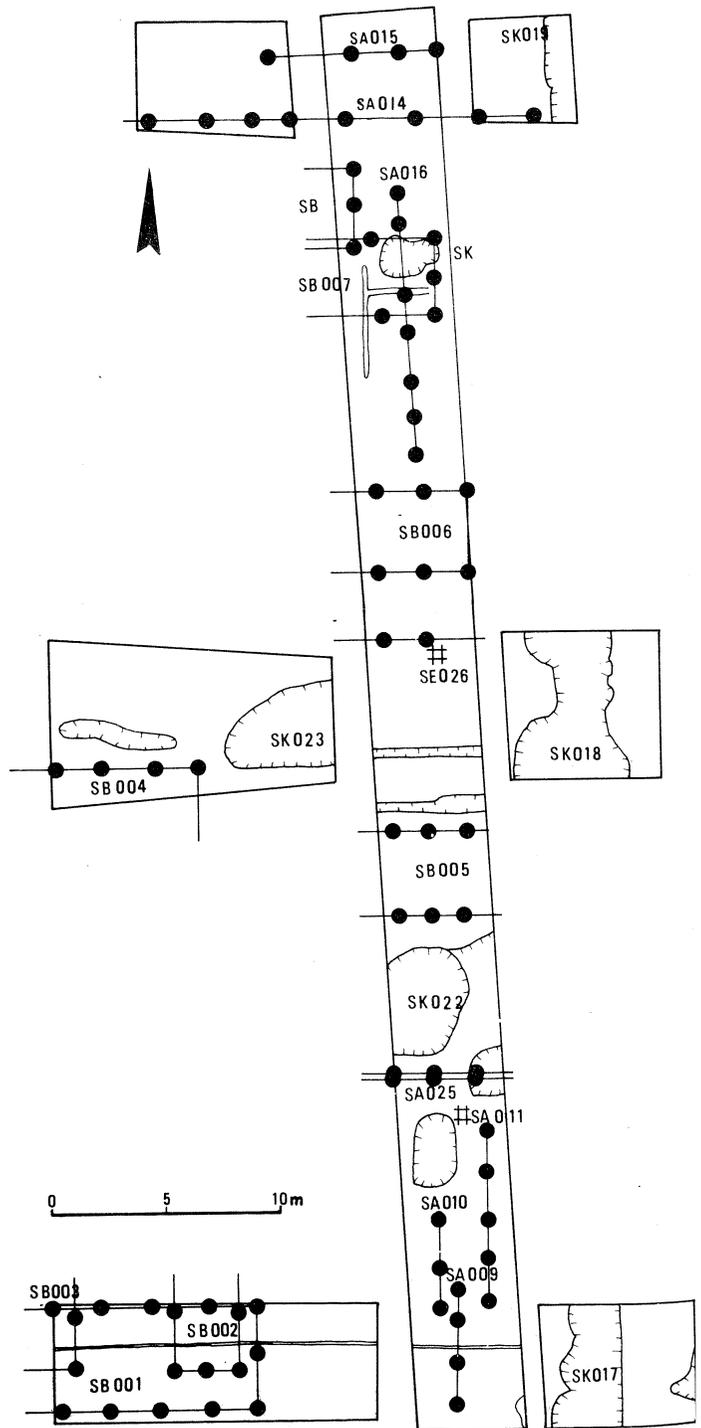
B 期 SB002・003を廃し、大きな柱掘形のSB001を作る。SB001は規模は不明だが、梁行2間、桁行4間分を検出。各柱間は8尺等間である。SA009は、3間の南北柵だがSB001の目隠し塀とすれば、SB001は身舎のみの建物となろう。SB001の柱抜きとり穴からは多量の奈良末の土器とともに二彩・三彩の瓦片が出土した。

C 期 SB005・006・007, SA010・011・015, SE026, SK021・024が層位などからこの期に分類できる。これらはさらに細分できるが、全体の配置は不詳である。SE026は直径約60cmの曲物を井戸枠としたもの。埋土から平安初期の土師器が出土している。SK024は新しい時期の土壇で、内部からは多量の炭化物、鋳鉄片、るつぼなど鍛冶関係の遺物が出土している。これと関連するものに、発掘区の南側、SK06付近の上層で検出した10数条の溝があり、埋土の状態は同じであった。この付近でたたら作業を行ったことを示すものであろう。

平安以降 内部に少量の瓦器を伴った溝が数条ある。農耕に関連したものと

考えられるから、この頃には大半が水田化していたものであろう。

小 結 今回の調査は発掘面積が少なく、坪内部の遺構状況は知り得なかった。しかし左京三条二坊の調査で確認した東二坊大路西側溝の座標から計算すると、奈良時代は主要な建物は坪境に接することなく、少なくとも大路側溝から7・8丈余の空閑地があり、その間には目隠し塀や井戸等住宅に付随する施設があったと推定できる。



第10図 左京二条二坊十四坪遺構配置図

Ⅸ 左京五条一坊の発掘調査（第90次）

本調査は、奈良市柏木町所在奈良県警柏木基地の建設にともなう事前調査である。当該地は、左京5条1坊4・5坪にあたる。4坪と5坪の間を通る南北小路は、その部分にすでに土盛りがなされていて、調査することができなかった。4坪内発掘区のすぐ西側は、昭和48年12月に行った第85次調査の発掘地である。

1 四坪内の遺構

A 期 SD908は、85次調査地から続く東西溝で、宅地を区画する境界施設と考えられる。溝以南の宅地の中心建物は、SB1073で、南面に底をもつ。SB1102は、SB1073の身舎とほとんど同規模で、棟を東西一線上にならべる。SE1093の井戸枠は残存せず、出土遺物も少ない。

I期 SB1073・SB1075・SB1080
SB1102・SD908・SE1093
II期 SB1071・SB1077・SB1100
SB1103・SA1082・SA1091
SE1093・SK1074・SK1094
III期 SB1072・SB1076・SB1101
SB1104・SE1081・SE1095
SK1092

4坪内発掘区主要遺構の時期区分

B 期 宅地境界の溝は、柵SA1082に変わる。中心建物は南方に移り、SB1071である。桁行が6間に拡張され、柱根が残る。柵と中心建物との間の空間地に土壌SK1074・SK1094がほられる。遺物はほとんど含まない。井戸は、SE1093がそのまま用いられたようである。

C 期 中心建物は、SB1072でA期の中心建物の位置にもどる。桁行は総長約14mでB期の中心建物と同規模であるが、1間の幅を拡張して間数を5間に減らす。東から2間目に間仕切をもうける。井戸SE1081・SE1095が新たにほられる。いずれも曲物を数段重ねて井戸枠としたもので、曲物の外面に接して長い板をたてならべ、囲いとしている。

SD908・SA1082の北側の宅地については、全体規模を知りうる建物がなく、時期も明瞭でない。SA1085は、SB1087と関連した遺構であるかもしれない。

2 遺物

遺物の出土量は多くないが、SD908とSE1081から土器がややまとまって出土

X 左京八条三坊の発掘調査（第93次）

この調査は、奈良県が奈良市東九条町字姫寺に計画した西売間団地建設予定地の事前調査である。この地域は、平城京の東市を一部含んでいる。

調査はまず予備調査として、敷地全域の残存状況を確認するために、幅5m、長さ100m以上の試掘トレンチを、東西に1本、南北に2本入れた。その結果、高低のあるこの地の地形は、岩井川の氾濫により土砂が堆積したものであることが判明するとともに、礎石列をはじめ多くの掘立柱建物、数条の溝を確認することができた。この所見をもとにして、ひきつづき南辺の小路をふくんで、左京八条三坊の九坪を中心に本格的な調査を実施した。その結果、東市がこれまでの文献上からすると推定通りこの地域に所在する可能性が強いことを推定させることになった。礎石列の発見された寺跡、および東市遺構にふくまれる地域の調査はひきつづきこの後に行われるが、以下概略これまでの成果を記しておきたい。

1 遺構

奈良時代条坊に関するおもな遺構には南北および東西小路、東市北辺をめぐる溝、堀河、寺院跡がある。このうち堀河と寺院跡については今回はじめて所在がはっきりとされた。

小路 発掘区の東寄りに九・十六坪を区画する南北小路90mを検出した。小路幅4m程あり、東西に側溝をもつ。東側溝（幅2m、深さ0.4m）が大きく、西側溝をふくめて道路幅員は6m（2丈）ある。南北小路は発掘区の東南部分で東西小路と交叉する。九・十坪を区画する東西小路は55mを検出した。南北に側溝をとまなう東西小路の規模は南北小路とほぼ等しいが、南側溝（幅3m、深さ1.5m）は東市の北辺を画するために特に大きい。この南側溝は交叉点で、南北小路下を木製暗渠（SX02）で通す。なお南側溝からは木簡・紙・布・漆器・銅銭などをはじめとする多量の遺物が出土した。

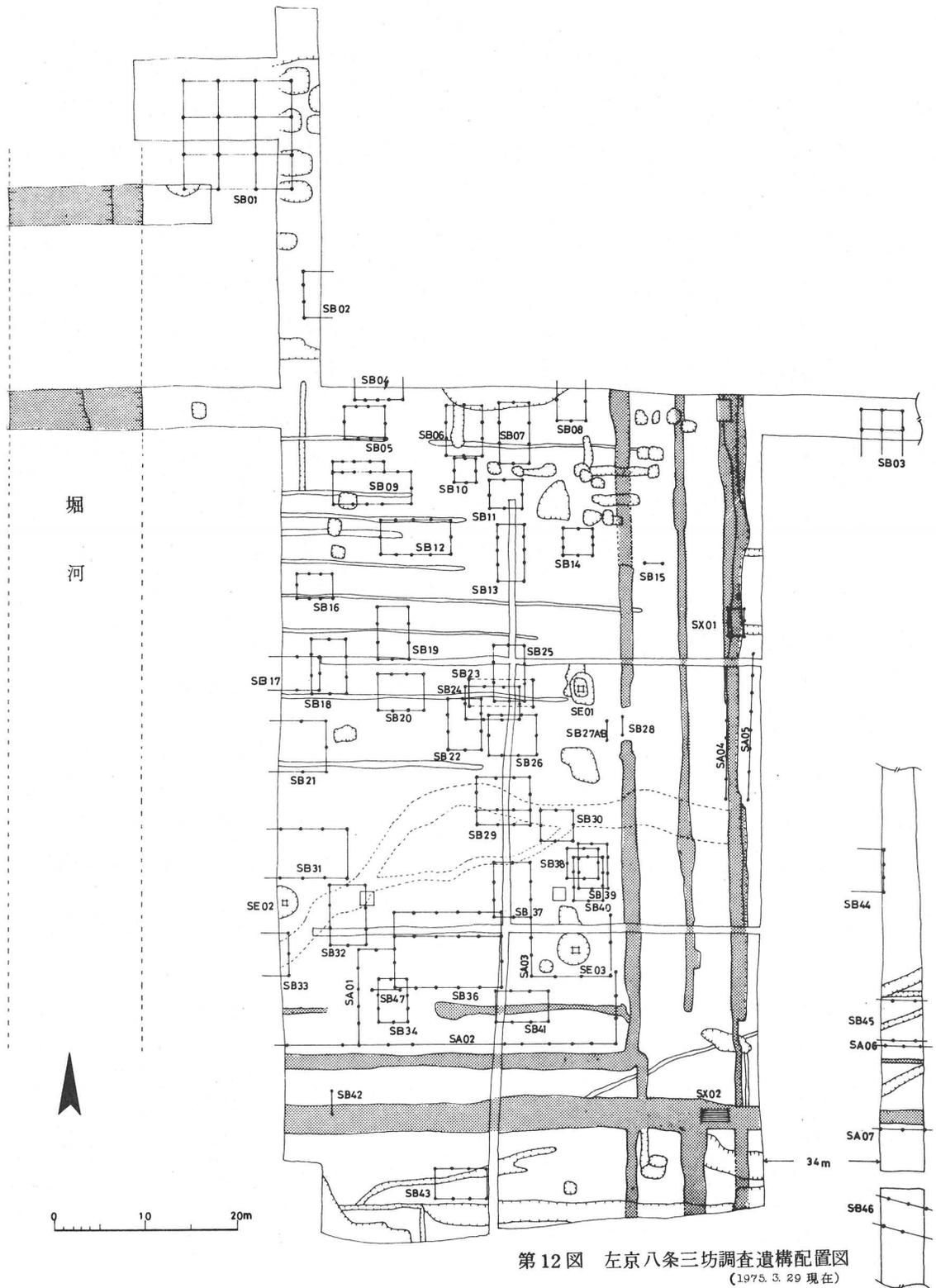
九坪 東西および南北小路と堀河にかこまれた九坪では、坪内に南北小路に沿った幅1mの溝がめぐる。南辺は一部途切れるが東辺には門よりの施設（SB

28)が開く。この内方に掘立柱建物36棟・井戸3基・堀3条・溝・土壙その他がある。各遺構は重複関係などから3期以上の変遷が認められる。建物はその規模から4通りのものがある。その1はSB・36・SB31・SB29で南半分にある。いずれも東西棟で、うちSB36・SB29は北廂をもつ。主屋的なものとみられる。その2は3×2間の規模で柱間寸法が5尺～8尺の小型建物ではほぼ全域にわたり、その数も多く、南北棟建物を主とすることが特徴である。その3は1×1間あるいは2×2間の柱間寸法が5～8尺の正方形小型建物である。5棟あり、東半部に集中する。その4は発掘区西北隅にある3×3間の建物である。柱掘方がきわめて大きいこと、北側の七条大路と西側の堀河に接した位置にあることとを併せて特別な楼風建物とみられる。井戸3基のうちSE01(1辺0.7m、深さ1.5m)は縦板組で、SE03(1辺0.9m、深さ1.8m)は横板井籠組みである。

十 坪 東市内にあり、これの北東隅にあたる。検出した遺構は建物1棟、東西溝、土壙のほか、小柱穴多数がある。しかし、今回の調査範囲では外周をめぐる堀、築地などの痕跡はみいだしていない。

十六坪 建物3棟(SB03・44・45)および堀(SA04・05・06)、橋(SX01)、南北小路東側溝に注ぐ東西溝2条などがある。

堀 河 今回検出した堀河は、幅約13m、深さ約1.5m(遺構検出面)の規模をもつ。発掘の結果、当初、素掘の堀河であったものを、その後、杭と平板を組み合わせたシガラミ状の施設で、護岸工事を行なっていることが判明した。多量に出土した遺物は、護岸施設以後のものである。この改修工事の時期は、出土遺物の年代から奈良時代後半と考えられる。遺物の多くは、土器類が大半を占め、若干の瓦類・木器・木簡が出土した。また、土馬・人面土器・人形といった祭祀的色彩をもつ遺物も多くみられた。こうした遺物が堀河といった用水施設から多量に出土した点で注目すべきであろう。なお、出土土器のうち、完形品が奈良末から平安時代初期のものが多く、それ以前のもので破片で検出される傾向にある。この事実は、堀河の清掃が定期的に行われていたことを示すと同時に、平城京の廃絶とともに、その交通の用が衰退し、堀河も廃絶したと推定される。トレンチ



第12図 左京八条三坊調査遺構配置図
(1975. 3. 29 現在)

の断面から判断すると、堀河の部分にのみ岩井川の氾濫による堆積がみられ、その痕跡がかなり後まで残っていたのではないかと思われる。佐保川と大和川を結ぶ運河としての機能をもったこの堀河の追跡調査は、今後の差し迫った重要な課題といえよう。

十五坪 東西小路南側溝に接した塀（SA07）、この南側に東西方向に並ぶ礎石3個（SB46）、礎石南側に広がる瓦散布面がある。礎石列は東西2間で柱間2.4m（8尺）、南北1間で3.0m（10尺）ある。瓦散布面からは奈良時代の瓦とともに飛鳥時代、奈良前期の軒瓦が出土しており、十五坪が寺院跡であることが確認されるとともに、寺院の主要部分が調査地域の南に接してある天神社付近にあることが推測された。

2 遺物

今回の調査地域から多数の遺物が出土している。遺物はおもに東市北側溝、堀河、井戸SE01・SE03から出土した。

① **東市北側溝** 溝堆積層の奈良時代遺物としては以下のものがある。

木簡 重要なものに「□東宮青奈 直□□」、**「進上駄一匹功四束□」**、「□□国□・□□里別公小足戸□」がある。計17点（うち削片2）

土器類 土師器・須恵器多数。施釉陶器（灰釉片・三彩釉片）2点。墨書土器として〔□□^(佐)何都麻之之□□一土師器杯〕・〔土寺一土師器杯〕・〔麻□一須恵器鉄鉢〕・〔垣一土師器皿〕などのほかに記号的なものを含めて12、人面土器1、土馬4がある。また、土師器杯、須恵器壺などに漆の付着したものが相当数あることは注目される。

木製品 挽物（盆）1、漆器（匙）1、曲物片・下駄1、櫛7、かんざし2、へらと刷毛10、削りかけ・人形1、人物画のある板2がある。

その他 布片（絹・麻）、紙片、皮革片、金属製品として和同開珎19、帯金具10、小型銅鏡2、銅薄板1、銅釘1、鉄釘10などがあり、ほかにるつぼ片、砥石片がある。

② **堀河** おもな出土遺物として以下のようなものがある。

木 簡 「□百七十文 □□」, 「□□□料酒一斗三升□九年九月廿五日」,
「符 民使 彼在□」

土器類 土師器・須恵器多数。施釉陶器片(緑釉・二彩釉)。墨書土器として
〔大福一須恵器〕〔佐一須恵器杯〕などのほか, 記号的なものを含めて29, 人面
土器14, 硯2, 土馬47, 土錘1がある。いずれも奈良末から平安初頭にかけての
ものが主体である。

木製品 挽物(高杯1, 皿1), 漆器片, 曲物3, 杓子3, 人形。

金属製品 鑄造関係遺物とともに鑄放しの和同開珎3, 和同開珎12, 神功開宝
4, 帯金具8, 銅鈴1, 海老錠1, 鉄斧1, 刀子1, 鉄製工具柄1, 鉄釘6があ
り, ほかに鑄型破片1, スラグ, ガラス玉4が出土した。なかでも鑄放しの和同
開珎はきわめてめずらしい例で鑄造関係遺物とともに注目される。

瓦 類 軒丸瓦(6135・6225A・6284)4点

軒平瓦(6691A・6721)3点

◎井 戸 SE01・03 から多数の奈良時代7土器が出土したが, このうち
SE01からは完形の漆器(壺)が出土した。

④その他の地域 このほかにも九坪からは奈良時代の軒瓦が出土し, また15坪内礎
石列および瓦散布地域周囲を中心に飛鳥時代軒丸瓦(単弁8弁, 単弁10弁各3点),
奈良前期の軒丸瓦14点, 軒平瓦22点が出土した。このほかに井戸SE03の南西にあ
る円形のピットから弥生式土器(第V様式)約15点が一括で出土している。

している。

3 小 結

九 坪 今回の調査で坪の中央を南北に通る堀河が見つかったことから, こ
の坪は大きく東半と西半に分けられ, 南北に長い区画であり, また南北小路の間
には幅6mの建物のない空間地的なものがおかれていることがわかった。外周を
囲う施設としては南面の塀列があり, 東辺に小路に面して門を開く。内方の建物
配置は大型建物が南半に集中し, 北半部に小型建物が比較的多く, さらに東半部

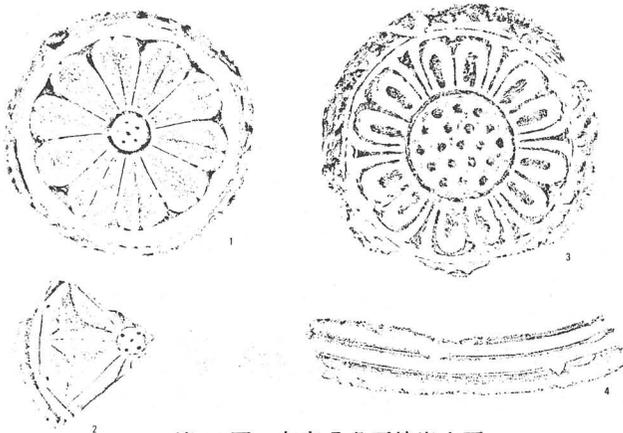
は井戸を中心に小型建物がまとまる傾向がある。現在のところ、建物地域間を仕切る堀などの施設がみつかっていないことから、坪内が一括使用されていた可能性も考えられるが、にわかには決し難い。さらに本坪が東市に北接することから一般宅地とみるよりは市と関連する施設が存在する可能性を考えさせる。

このような一定の区画のない建物配置をもつ坪のありかたは、従来文献上から推察されている宅地割りともちがひ、今後の大きな課題であろう。

堀河 平城京の東堀河は、従来天平勝宝八歳(756)の相模国司牒、東西市庄解や知恩院所蔵市図などにより東市の西辺、八条三坊二~四坪の東よりを二丈の幅で斜行していたと考えられていた。ところが最近の地籍調査で八条三坊十坪から南は地藏院川まで南北に細長い地割りが存在し、河道を示しているのではないかという指摘があり、それが今回の発掘で確認された。発掘によればその水路が九坪のほぼ中心を河幅四丈強で流れ、地割によれば東市の東半分十・十一・十二坪の中央部を貫通することからみて、東市の物資運搬に重要な役割を果たした堀河の主流であったと考えられる。

十五坪(寺院跡) 南北トレンチで検出した礎石列を含めて十五坪内にある寺院については全く予測しないものであった。今回の調査では主要部分の調査には至らなかったが、出土遺物からは飛鳥時代から奈良前期にかけてつくられた寺院で、さらに奈良時代になって条坊に組みこまれたものとみられる。この地が小字「姫寺」であること、鎌倉時代末期の記録に「ヒメタウ」の字がみえるほかは

寺院の主要部にあたると推測される天神社の由来についてははっきりしない。なかでも姫寺の名は平安京での市の守り神といわれる「市姫の神」「市姫金光寺」とも対比される点、市との関連においてきわめて重要な事実である。



第13図 左京八条三坊出土瓦

XI 薬師寺西僧房地区の発掘調査

今回の調査は薬師寺伽藍の復原とその変遷を明らかにするとともに、伽藍整備計画の資料とするための寺の依嘱によるものである。

調査は西僧房を中心とし、一部食堂西端、鐘楼推定地、西回廊、及び本坊北方地区である。なお、西回廊は後世の破壊が著しく、基壇土の一部を検出したにとどまり、記述を略す。

1 遺構

西僧房 僧房は薬師寺伽藍発掘調査団（団長杉山信三氏）による昭和45年夏の調査で東僧房を検出し、規模や間取りなどがかなり明らかになっている。

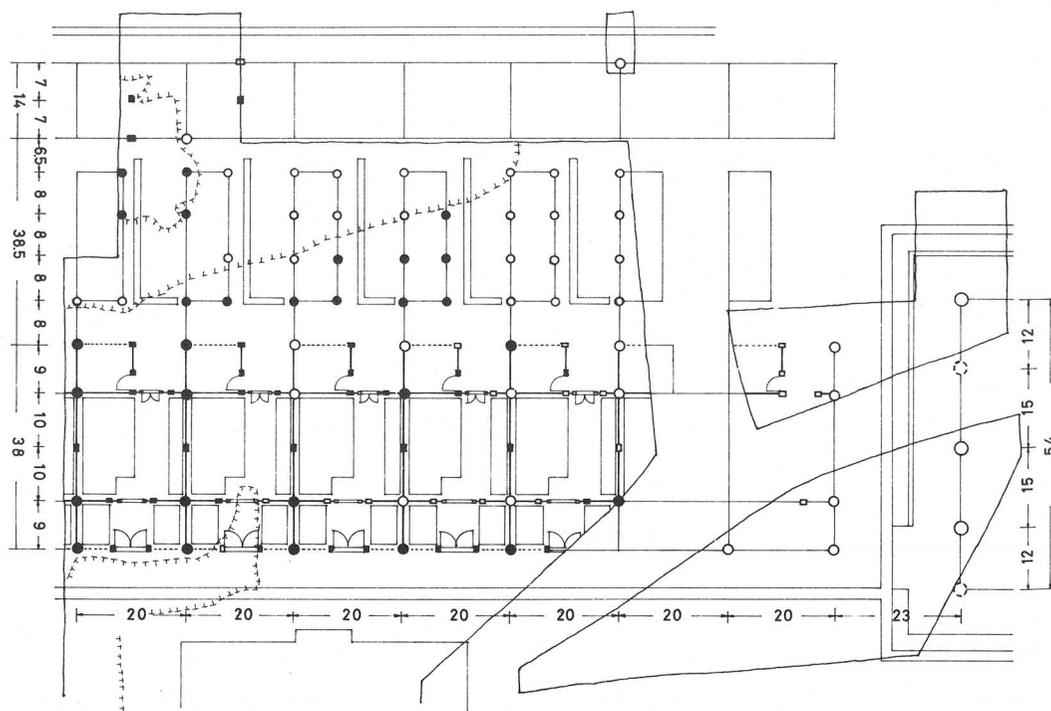
今回は西僧房の東から7房分の調査を行い、大房と小子房及び付属屋などを検出した。大房北側は中世に沼や溝と化した時期があり、小子房などの遺構はかなり破壊されていたが、大房などは厚く焼土で覆われ、保存は良好であった。

大房は食堂と棟心をそろえ、東僧房と対称に東西棟に並んでいた。食堂西側面と僧房の東妻は心線で約7mを計る。各房は桁行が天平尺20尺、梁間38尺に区切られている。基壇は前面の葛石が玉石一段積みの低いもので、後述の付属屋や小子房も同一の基壇上に建てられている。正面の雨落溝はこの葛石を北側の護岸としているが南側は何等設備なく、素掘りのままである。身舎は20尺で前後に9尺の庇がつく。庇前面柱心から葛石までは7尺ある。正面は凝灰岩製地覆が通り、一部には焼損材が残り、当初から両脇に連子などで間仕切りを設けていたと考えられるが、後にはほぼ三つ割りに地覆石背面に野面石を据え、中央を扉口に改めている。大房は大きく前・中・後の3室に分けられる。身舎正面は中央間8尺を扉口、両脇間6尺を土壁とし、内部は20尺四方の一室となる。背面は身舎、庇とも中央に柱を立て、10尺2間として、東方間は土壁としている。背面庇は東方間を開放とし、西方は東から、おそらく片開きの戸で出入する部屋としている。

房境や中・後室の壁下の地覆は丸・平瓦を片側に立てその間にも数枚瓦を重ねる特色ある工法によっている。その上には厚さ15cmの焼けた土壁が遺存している

個所もあった。身舎内部には小形の凝灰岩切石などの束石が点在し、各房を通じて、西方には床張り、東壁際には棚などを設けていた状況が復原できる。西第七房では、礎石の上にさらに石を重ねていて、柱根元の腐朽が甚しかったことを示している。また床面も数度かさ上げされたり、内部の束石も後には玉石や磚に置きかわり、前面庇にも後には床を張ったりするなどかなり改造の痕跡がうかがわれる。

大房の北側柱心から9尺北では各房毎に、西側柱筋を房境にそろえた1間×3間の南北棟建物、及びその東側にL字型の玉石溝と中庭を検出した。この建物は桁行24尺、梁行8尺で、大房と同様な瓦を重ねた地覆があり、間仕切りがされており、渡り廊ではなく部屋としての使用が考えられる。文献にはこの建物に該当する名称がみられず、今回は「付属屋」と仮称しておく。さらに付属屋の北側心から7尺の位置には梁間14尺の東西棟の小子房の存在を確認した。小子房の背面



第 14 図 薬師寺僧房復元図

には樞板を両側に立てた幅40cmの雨落溝を検出した。西第三房では小子房基壇の下に木樋が通り、中庭から北への排水施設となっている。

僧房は『薬師寺縁起』では天祿四年(973)に焼失し、一部は再建されたとしている。今回調査によれば火災にあったことは間違いないが、現位置での再建の形跡は全くみられなかった。これは後述の遺物の状況からもいえる。

食堂 食堂は昭和45年の調査で位置や基壇規模(東西46.8 m×南北21.7 m)、正面階段と基壇周囲の状況が明らかになっている。

今回の調査は食堂の西端を発掘し、基壇地覆石、玉石敷きの犬走りや雨落溝を検出した。そのほか、あらたに西北隅柱推定位置には根石を検出し、西側中央とその東側の推定柱位置には礎石下地業と考えられる砂質土の地固めを発見した。これによって食堂の梁間は身舎が15尺、庇12尺と推定することができた。食堂西面の南よりの犬走り部分では石敷きの痕跡がみられず、また僧房前面庇に面する位置でもあり、ここに階段の存在が考えられる。

鐘楼 鐘楼跡の調査は今回がはじめてであるが、これを対称の位置の経楼についてはすでに調査が行われ、基壇規模や階段位置などが確認されている。鐘楼は経楼と正しく対称の位置に検出された。基壇上面はかなり削平をうけ、礎石据えつけの痕跡などは失なわれ、柱位置は不明である。基壇化粧石はほとんど抜き取られていたが、西面及び北面に凝灰岩製階段を残し、北面階段部には地覆石が一部遺存していた。しかし、階段部以外の抜き取り溝は幅がせまく、地覆石を略し、直接羽目石を立てていた可能性が強い。北面階段は幅約3 mで約90cmの出、西面階段は幅4.1 m、出が約1 mある。これによると基壇規模は東西15.8 m、南北19.5 mに復原され、経楼基壇と全く同規模であることが確認された。したがって周囲の基壇の出は4 mを越えることとなり、かなり軒の出の深い構造を考えねばならなくなった。

本坊北方の調査 幅3 m、長さ30 mの東西トレンチ2本を設定した。

東トレンチ 土壇4と溝1を検出した。土壇からは平安初期の軒瓦を含む多量の瓦片が投棄された状態で出土した。溝は南北方向で、その東肩を検出した。溝

埋土には瓦器が含まれるが溝底は未確認。

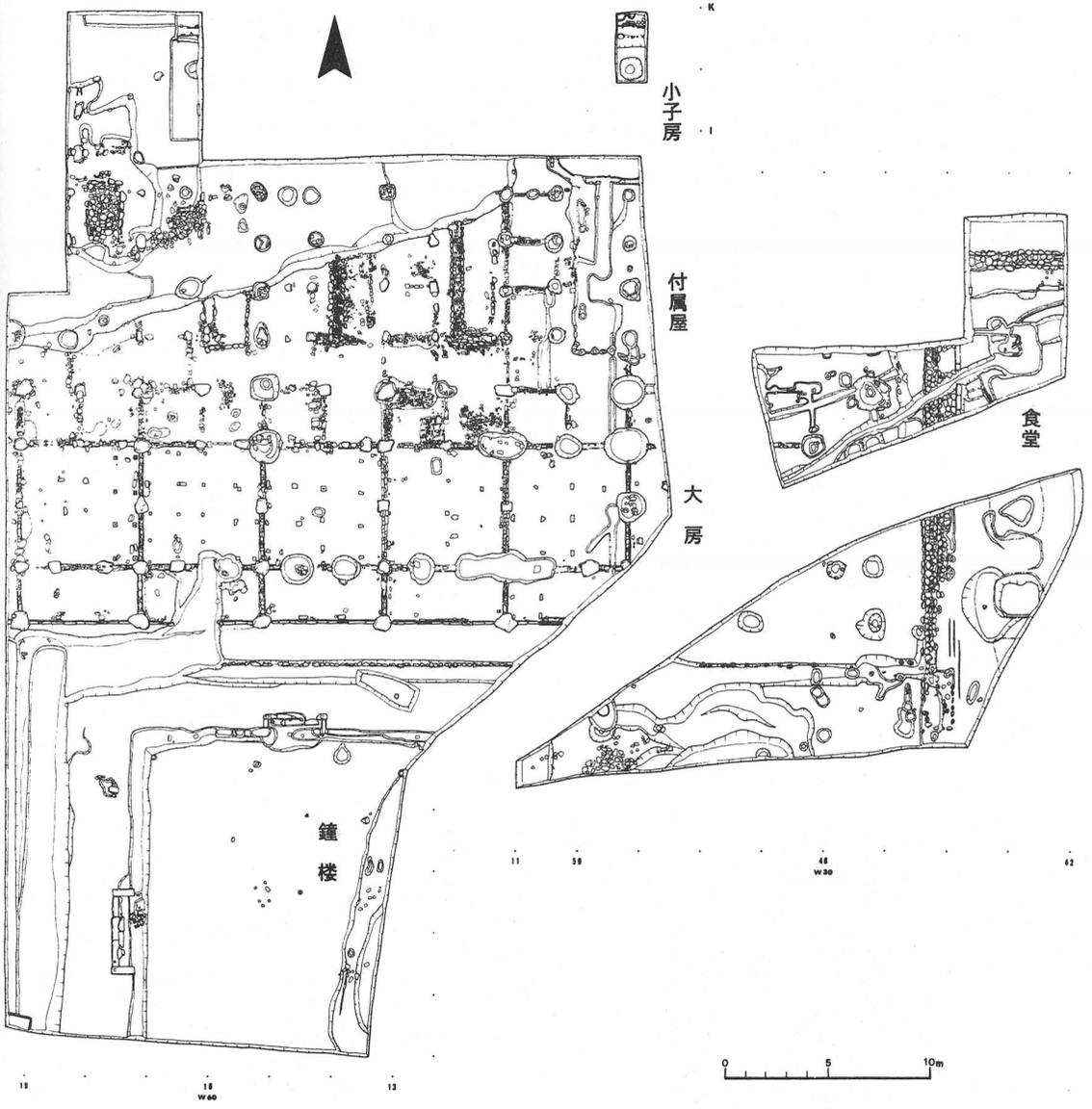
西トレンチ トレンチ東半分で中世の土壌2及びピット9を検出した。ピットはほぼ東西に並ぶが、建物や柵などのまともりはつかめず性格は不明である。最も東のピットからは「薬師寺東院」銘の軒平瓦・灯明皿が出土している。トレンチ西半では近世以降の土壌、井戸、石列を検出した。土壌からは灯明皿・近世の軒平瓦が出土した。井戸は径1.5 mほどで、下半を玉石で円形に積み、上半を丸太で方形に組み、上に厚板で蓋をしている。石列は南北方向で、東側の土溜めになっている。

この地区は「薬師寺縁起」引用の「流記」の記載によって倉垣院などに比定する考えもあるが、今回の調査では明確に奈良時代にさかのぼる遺構はみられなかった。ただ、東トレンチ両端の東北溝については、もしその掘穿が奈良時代に遡るとすれば、寺域内における条坊関係の遺構になる可能性が指摘される。また、江戸時代の絵図面ではこの付近を子院跡と伝えており、西トレンチ発見の諸遺構がそれに該当するかもしれない。

2 遺物

ここでは西僧房出土のものについて述べる。西僧房からは瓦・土器・石製品・ガラス製品など多様な遺物を発見した。これらはすべて天祿四年(973)の火災で埋没するに至ったものである。

瓦類 基壇上やその周辺に広がる焼土中から大量に出土した。軒瓦でみると軒丸瓦では、6276 A型式・6276 B型式など全体の約60%、軒平瓦では6641 G型式・6641 H型式など約20%が本薬師寺出土瓦と同汎のもので占められている。このうち、従来、本薬師寺でも例の少ない6121型式の瓦当部が完形で出土し注目された。これらは平城移建に際して運ばれたものと理解される。このほか平城宮式と酷似する文様で薬師寺のほかは出土がきわめて少ない軒丸瓦6279 C型式や6304 E型式、軒平瓦6664 O型式の3型式もかなりある。平安時代のものは巴文を含めてきわめて多くの種類が出土している。そうした中で従来、天祿火災後の再建に関連するとして平安中期ごろに考えられていた「擬古作」の瓦



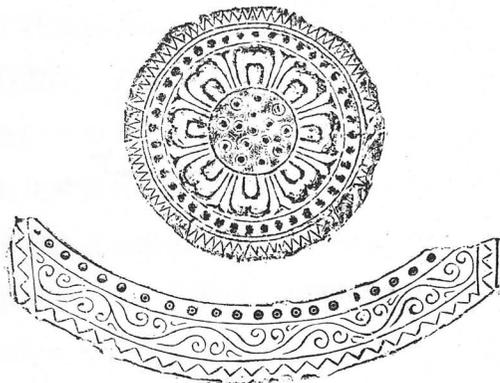
第 15 図 薬師寺僧房・食堂・鐘楼遺構図

もあるが、今回の調査では、明らかに僧房の間仕切りの補修に使われており、少なくとも天祿火災以前、平安前半期まで遡ることが明らかになった。

土器類 僧房の床面から多数出土し、土師器（図1～5）、須恵器、黒色土器（6～11）、灰釉（12～17）、緑釉（18～25）、三彩（26）などのほか、中国製磁（27～30）がある。大多数を占めるのは土師器・黒色土器の碗・皿類で、これに灰釉の碗、皿などが加って食器などの日用什器を構成している。これに対して数は少ないが、仏器として、多嘴壺（三彩・灰釉）、花瓶（灰釉-17）、鉄鉢（二彩-図26）、香炉（緑釉-24）などの施釉陶器がある。緑釉の唾壺（20・25）碗（18・19）・皿（21～23）もこれに含まれるであろう。これらの中で、三彩多嘴壺や二彩鉄鉢は奈良時代の作で、約二百年間伝世が知られる。また緑釉唾壺（25）は口縁部の欠損後、縁を平らに磨っており、用途を変えての使用がうかがわれる。中国製品は白磁碗（27）や青磁碗（28）・青磁輪花碗（29）のほか、注目されるのは葉形の貼花文をもつ青磁水注（30）である。湖南省瓦渣坪窯の製品に比定され、日本での出土品として稀例に属する。

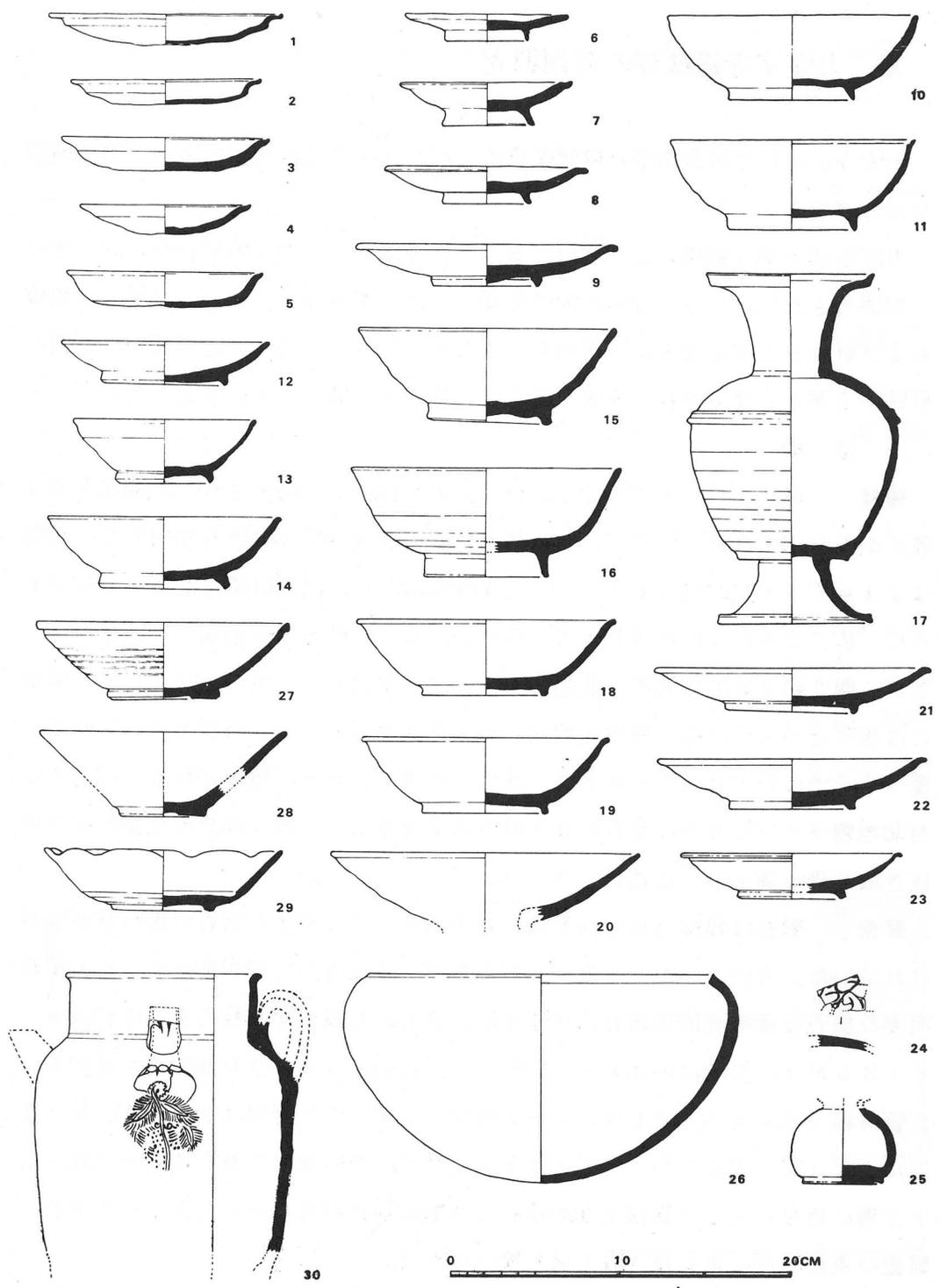
金属製品 最も注目されるのは小金銅仏断片である。反花・請花を重ねた台座と両脚下部、衣の一部を残している。像高を復元すれば30cm前後になろう。これに接して厨子の一部と思われる金銅板も出土している。そのほか、数多くの鉄釘が発見され、鉄製戸口金具や銅製かんぬきなど建物に関係するものも多い。

以上のほかに、ガラス製小玉、砥石が発見されている。



第16図 薬師寺出土瓦

これらの遺物は房の前室・中室の東よりの部分に集中して発見され、なかには棚から転落した状況を示すものもあった。また、食堂に近い房では土器・金属器などの遺物の量は少なく、西の房ほど多いという傾向もみられる。



第 17 図 薬師寺出土土器

XII 大安寺鐘楼等の発掘調査

大安寺小学校の校舎増築の現状変更にともない奈良市の依頼によって発掘調査したものである。

当該地は大安寺鐘楼および僧房にあたる。鐘楼については昭和38年と同41年に一部調査されているが、今回は鐘楼北面から僧房東側柱列にかけて発掘し、鐘楼および軒廊との関連などが一層明らかになった。さらに僧房・鐘楼間には石敷の痕跡や土壙等も発見され、地表下ごく浅い位置に遺構の存在を確認した。

1 遺構

鐘楼 鐘楼は浅いところでは現校庭面から約20cmで検出された。基壇上面は既にかなり削平されているが、北側柱列にあたる根石群3箇所を検出した。梁間は7.4m(天平尺25尺)あり、「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」記載の「長三丈八尺、広二丈五尺」の広さとよく一致する。基壇化粧は凝灰岩製で、地覆石の一部が、西北隅と北面に残る。北面中央部には地覆を据えた痕跡はみられず、繫廊に直接つながっている。鐘楼北側柱心から北面地覆石まで、西側柱心から西面地覆ラインではいずれも3.7mあり、基壇は東西14.8mに復原される。西面では西北地覆ラインの外方に延石の抜き取り溝を発見した。現存西北隅地覆石はこの抜き取り溝の埋土の上に据えられている。

繫廊 繫廊は鐘楼と講堂西軒廊をむすぶもので、先年の調査で根石群が発見されていた。今回の調査では鐘楼とのとりつき状況等が一層明確になった。繫廊南妻の根石は鐘楼北面地覆石にほぼ接し、妻心から鐘楼北側柱心までは約4m(13.5尺)、梁間は約3.6m(12尺)、桁行約2.7m(9尺)で北へ延びる。「資財帳」の「長各二丈七尺、広一丈四尺」に比べると梁間は2尺狭い。長さを仮に9尺3間とするとちょうど2丈7丈となる。今回検出の根石は同一位置で上下2層に重なっている鐘楼北面地覆石には繫廊羽目石のかかる欠きこみがあり、繫廊の東西両側に延石抜き取り溝も検出された。

僧房 僧房は「資財帳」に見える「西太房北列」の東側柱筋に相当する根石

群2個所を検出した。柱間は3.9m(13尺)である。基壇の発掘区北半には幅2.5mの中世溝が東西方向にあり、北へ折れて延びている。さらに基壇東面には近世の南北溝が掘られ、基壇前面の状況や雨落溝は明らかでない。

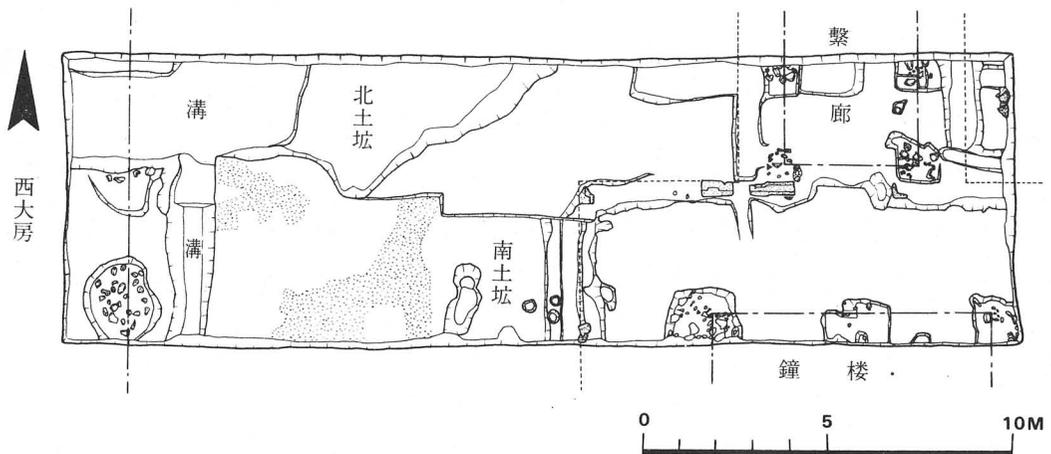
石敷 鐘楼と僧房の間に凝灰岩の石敷の痕跡が検出された。凝灰岩細片が厚いところでは約4cm残っているが風化が著しく目地やもとのひろがりなどは不明である。

土壇 発掘区の北と南にある。北土壇は僧房・鐘楼のほぼ中間に、東西約7m、南北約3.5mでさらに北へひろがり、西側は前述の中世溝で破壊されている。大量の瓦片が投棄された状態で出土し、火中の痕跡を残すものもあった。南土壇は鐘楼の西側にあり、南北約2m、東西約0.7mで、凝灰岩切石の細片とともに少量の瓦が出土した。両者とも後述のように平安初期までの軒瓦を含んでいる。

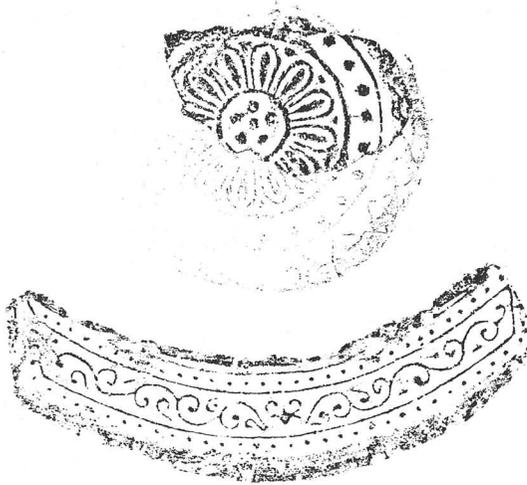
2 遺物

瓦が多数を占め、土器は少量である。瓦の大部分は北土壇から集中して出土した。軒瓦は、軒丸瓦6138型式、軒平瓦6712型式が最も多く出土した。

土器は遺構に関連するものでは、鐘楼西側の延石抜き取り溝の埋土から土師器・黒色土器・灰釉陶器の砂片が出土し、10世紀頃の特徴をもち、鐘楼とその周辺の改修の年代の上限がおさえられる。



第18図 大安寺鐘楼地区遺構図



第 19 図 大安寺出土瓦

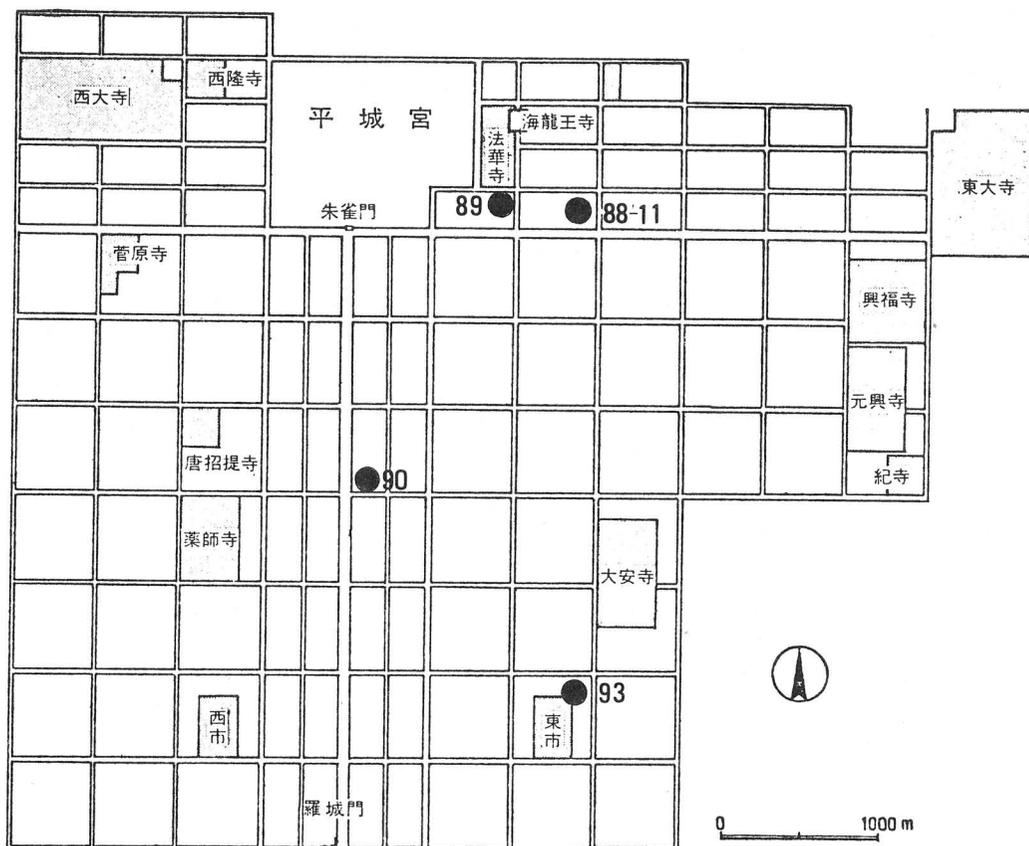
3 小 結

鐘楼は寛仁元年（1017年）の大火で焼失した記事（『一代要記』）があり、年代的には近い。しかし延喜11年（911）の講堂・三面僧房の火災（『菅家本諸寺縁起集』）の際にも、位置的に近接する鐘楼も焼けている可能性がある。ただし、今回の調査では改修の理由をそれらの火災と結びつける積極的な資料は得ていない。

XIII 法華寺旧境内の発掘調査（第88次）

現状変更届等にかかる調査

法華寺旧境内における発掘調査を5件実施した。いずれも家屋改築にともなう事前調査であり、発掘面積も限られている。さらに現在に至るまで生活の場であったということもあり、後世の攪乱はいちぢるしいものがあり、明確な遺構はわずかであった。88-8次においては東西方向の石列を検出した。この石列は南に面をそろえており、石組みの溝であることを確認した。溝の堆積土からは奈良時代の遺物が出土しており、この溝の時期を示している。この調査地は、法華寺回廊の直ぐ西に推定できる位置にあるので、法華寺の排水溝であろうと考えられるこのほか、88-9次で柱穴を数個検出した程度であり、顕著な遺構は認められなかった。



第 20 図 平城京調査遺置図